苗字帶刀指免覺書

小高取格
藤井柳左衛門どのへ

覺

（那賀郡秋本嘉太郎氏所藏）

那賀郡小仁字村上知先規奉公人
利　藏

右之者儀去る卯年仁字谷筋百姓共組頭庄屋柏木叟右衛門指配候割符銀不都合之儀有之候樣申唱俄に村々相催多人數阿井村へ相集候砌右場所へ罷出候樣再三申來候得共發端ゟ同意不仕候所谷中一枚之申談に一致不仕儀に候得は追々迎之者多人數相增罷越一同不仕におゐては家宅も引崩し可申抔色々相威候得共終に心底相勤不申御掟大切に相守詰候所却而意根に狹洩人と相唱相障稼之通相失飢にも相及候樣三ヶ年之間被相仕成候所相凌始終神妙に罷在候段至極尤之事に候依之向後苗字帶刀指免候

右之通御當職御書付を以被御渡候に付令寫指遣者也

原與右衛門印
伊勢默助印

小仁字村上知先規奉公人
小川利藏方へ

苗字袴差免覺書寫

覺

（名東郡富永久基氏所藏）

御掃除之者
富　次

右之者儀年來彼是御用ゟ出精相勤旋宜者之趣に付此後苗字袴差免候條此段可申付旨竹内龜五郎板東精兵衛可被申聞候　以上

弘化元辰年七月十二日

苗字帶刀心得書

（麻植郡鈴木亮介氏所藏）

其方儀麻植郡鴨島村御藏百姓次兵衛三男源藏に候處此度我等當時召抱先若黨之者召仕然る上は苗

字帯刀勿論之事候

安政三辰年六月

坪内主水㊞
鈴木堅蔵へ

苗字帯刀夫役指免狀

覺

（那賀郡清川重吉氏所蔵）

左之者儀那賀郡八貫堰築留並久留米田新用水御普請御人目之内へ御國恩爲冥加金ナ指上候段奇特之心得尤之事に候依之左之通申付候條此段可被申付候　以上

中山村御藏百姓
龜五郎

六月三日

右之者儀此度本人苗字帯刀夫役指免候

稲田覆太郎印
箕浦久左衛門印
大口瀧之助印

右之通御當職御下知有之候に付令寫指遣者也

慶應三卯年七月

二字帯刀願上書寫

中山村夫役御免人
清川龜五郎方へ

乍恐奉願上御訴訟之事

（海部郡池内龜太郎氏所蔵）

一私共儀先祖ゟ代々淺川浦庄屋年寄役義相勤御影を以私共迄相續仕來難有奉存候然所私共元祖父は越前國福井之城に組仕罷在候時は平岡五郎右衛門渡邊五右衛門等相應之格式を以罷在候由先祖ゟ傳承候泰松入道亂を起城上被落御國へ渡リ海部之内淺川浦へ立越見及候所其時は磯浦と申候旨網代崎邊山々に家五軒三軒御座候由只今之淺川と申所は一圓之野原薪に而伐開候山々に御座候五軒三軒を呼寄夫より上々浦成を申趣に御座候右之仕合私共先祖共淺川浦之義は開立只今迄両家庄屋年寄六代七代相續仕候

一於御城内之太守樣御目見ゟ被爲仰付冥加に相餘リ難有仕合奉存候淺川浦之義相應に港宜場所に而御座候

土佐守樣御通船之砌は私共沖合ゟ罷出御役船へ御案内申上候天氣之御趣にゟ當浦港へ御入船御

汐繫被爲遊候節は御注進申上る内御用等御座候得は罷出相勤申候尚又他國御國々御荷船商船と
も度々汐流被是之砌へ船仕候是又早速右船へ罷出船頭等へ應對仕候而万端行方相尋御注進申上
る儀に御座候尤他國にゟ上乗船頭刀脇指を帶居申候私共脇指迄御免之義に御座候得は右船頭へ
應對之砌御用之懸にゟ御外文にも相懸り候哉と乍恐奉存候間私共両人へ乍恐二字刀御免被爲遊
被下候樣に奉願上候別而不調法成る私共右樣之御願申上る儀御機嫌之程奉恐入候得共御免被爲
遊被下候はゝ彌以御用方丈夫に相勤り可申と冥加至極難有仕合に奉存候右御奉願上通被爲遂聞
召被下候はゝ難有可奉存候　以上

月　日　　庄屋印
御當　　年寄印

一家成立申上覺

（德島市久米竜藏氏所藏）

一先祖久米安藝守と申者細川に仕當郡芝原に居住中富川合戰之節討死仕候右安藝守に男子四人嫡
子長門拾六歳ゟ官に成當村烏ヶ森に船屋敷に指置御座候家來方に贅居二男龜壽丸三男犬千代共
播州赤松之方へ行四男松千代は長門を合宿仕後形部と相改別宅仕居申候此形部成行奥に申上候
右長門後七郎左衛門と改名仕上助任村政所相勉永錄十二年八月廿七日病死仕候
但此頃當村青蓮寺旦那之處天正六年長曾我部殿兵火に被犯滅寺に成唯今助任万福寺旦那に而
古代之事相分り不申伊勢御師福井帶刀古代に相更り不申去る亥年帶刀方古帳相調へ申候所天
文六丁酉年帳面に政所七郎左衛門と有之由帶刀方ゟ書狀指越御座候
『以下文化十酉年八月、迄附箋なり』
（此龜壽丸後四郎左衛門と改名犬千代は六郎兵衛と改名播州に住居之處天正十三年　蓬庵樣同國
龍野ゟ御越被遊申に付右両人御召連被遊候由其後望之義有之候はゝ可申上旨被仰出候に付四郎
左衛門申上候は故郷芝原に住居仕農作を以相暮仕官之望は無御座旨申上候由則右村政所役被仰
付候六郎兵衛は仕官之望申上候處高貳百五拾石被下置旨被仰出候に付申上候は父安藝守中富川
合戰之節粟之中に而討死仕候得は三好方へ味方仕候百姓共を家來に被下知行所も討死し土地を
被下置候はゝ五拾石返上可仕旨奉願御聞屆被下候由
右之通今に双方相居申旨此度舊家御調へに付芝原村庄屋四郎左衛門方系圖に有之旨物語に付聞

取書付紙いたし置者也　文化十酉年八月）

一天正十三酉年

蓬庵様播州龍野ゟ御入國被遊候節別宮川口ゟ御入津被遊に付右七郎左衛門伜七郎左衛門別宮浦庄屋當左衛門両人右川邊造船に而罷出御迎仕一宮之城迄御道御案内仕其節両人初而御目見仕御上下拜領仕今以所持仕候

一其後德島之御城出來に付於御城御目見仕來候初而川御遊山之節七郎左衛門宅へ被爲懸御腰先祖之事御尋被遊候由其節申上候は前條之運然とも只今は零落之身に而處之名に寄烏野と相改候旨申上候由御入國被遊候得共御供之御諸士中少御手薄に付三好家又は浪人筋目之者共餘多在々に郷民塾居仕候者御撰御陣之節は御諸士之列に御加へ被成可被召連又は御留守御城内固並御境目固等之儀望次第可被仰付旨被仰出候由其後多田甚春殿御使者に而可被召仕　御書御脇御扇子被下置候則甚春殿被仰聞候は此御扇子は織田信長公江州於阿土新城御築之節諸國大名年始之拜禮其砌狩野元信に畫を右扇子壹本宛諸大名へ被遣候右扇則

蓬庵様御拜領被遊御所持被遊候處烏之繪に而有之候に付處之名烏野之苗字によせ御直筆之御書にうの七郎左衛門と御當被遣候故夫ゟ宇野と書改申候

一慶長二年朝鮮御陣之節三ヶ度御人數被遣候砌

蓬庵様被地チヤハンと申處に　御在陣被遊候節七郎左衛門御供仕無恙罷歸申候其節持〇と申傳候扇子今以所持仕居申候

一同五年關原　御出陣之節

至鎮様下野國小山迄御越被遊候節七郎左衛門御供仕候由伯父形部は

蓬庵様ゟ高木法齋老を大將に被成北國へ御人數被遣候に付罷越申候由御歸陣以後法齋老を始罷越候御人數不殘御改易被遊候に付形部は御國立退淡州須本へ罷越脇坂中務様へ被召抱唯今は播州龍野に而脇坂淡路守様御家老相勤知行八百石取居申四拾ヶ年程以前私親六郎右衛門代迄文通仕候

一大阪御陣之節御陣御觸被仰出候由

一土州長曾我部殿居城被召上候節郷士面々百姓共申合一揆仕其節御境目固に罷出候様御觸被仰出候由

一廣島御陣之節御陣御觸被仰出候由

一島原御陣之節右同斷

右四ヶ度御陣之節罷出候様御觸御座候得共右七郎左衛門義は慶長七寅年十一月廿三日病死仕伜幼少に付七郎左衛門弟市郎兵衛と申者罷越申候右市郎兵衛軍功を以四代目長左衛門義寛文二丑年壹領壹正に被仰付　御目見仕來候處右長左衛門孫久米源七と申者享保六年欠落仕絶家に罷成申候

一寛永七午年三代目七郎左衛門貳男善太夫御徒士被召出只今助任西内拜領屋布に居申候

一寛文九酉年祖六右衛門嫡子八兵衛と申者出岡乎右衛門様御下代に被召出候

右之通私家筋之義先年は

御目見仕候得共貳代目先祖七郎左衛門相果伜六之助幼年に付万端伯父市郎兵衛方に引請申私方は本家に而七代之間血脈相續代々庄屋役相勤居申候右之運御勘考被下度御事に御座候往古之運筆記も御座候並申傳之儀とも書顯奉入御高覽候

享保十一午年六月二十四日　　巳上

上助任村庄屋

六　兵　衛

本庄官左衛門様御手代

高　瀬　吉　兵　衛　殿

右書付に壹領壹正に被仰付被下候様御願書相添奉願上候處左之通被仰出候

「此所に下の如き附箋あり」

（此扣書之運御郡代速水善作様へ申上候所面白嘶承候本扣書指出候様被仰候に付指上候所當時御預り被成候旨被仰聞候其後數度御指戻し被下様申上候所寫書は御下ヶ被下候得共曾祖父六兵衛手跡に而相認候扣之儀は未御指戻し不被下候に付後年之扣にも相成候哉と如此記置者也　文化十酉年八月）

覺

名東郡上助任村庄屋六兵衛儀先祖筋目並其身勤功之趣段々申立家筋之儀に御座候間久米源七壹領壹正株相續被仰付被下様紙面を以申出候六兵衛義傳馬根取之在處に而御用多場所年來無間斷相弁流木留木役も被仰付置候所精出入毎々懸留彼是宜相勤候因之願之通久米源七跡壹領壹正株相續被仰付庄屋役其外御用之義も有來通被仰付候

右之通六兵衛へ可被申渡候　　巳上

十月十三日

右之通被仰出候に付則御書付寫指遣候　　以上

享保十六亥年十月十四日

安富亟右衛門

名東郡上助任村壹領壹正

宇野六兵衛とのへ

右之通壹領壹正に被仰付祖父孫右衛門奉願候は郷高取に被仰付被下候はゞ當村新川土橋永々懸替並孫右衛門五拾三ヶ年諸御用相勉候段申立其上金子貳百拾両指上可申旨奉願左書之通被仰出候

覺

名東郡上助任村壹領壹正

宇野孫右衛門

右之者儀堀抜新川通路之土橋永々懸替仕上度旨且此度御要用之金子とも指上候段彼是寄特之事候依之郷中小高取に被仰付居屋敷高六石被下置候條此段可被申渡候　以上

二月十八日

右之通御當職以御書付被仰出候に付寫指遣者也

天明六午年二月十九日

江口仁左衛門

上助任村

宇野孫右衛門とのへ

右之通御高取に被仰付御座候處右上納金指支申に付當孫右衛門代に成寛政三亥年正月御高取被召上翌丑年四月五日郡付浪人に被仰付候

一蓬庵様御入國以來　御代々様被爲懸御腰御座候上享保元申年九月

操山様被爲懸御腰私門前に櫻木植付候様御意之旨に而其節御供被成佐渡平馬様寺澤茂八郎様方被仰渡猶亦御郡御奉行今枝千右衛門様へ御手配被仰付今以生し居申に付右櫻花盛御覽並私方に以前拜領之品々爲御覽文化六巳年二月二十八日

良遷院様被爲懸御腰難有奉存居申候

右は此度御觸被仰出候は軍功有之者

瑞雲院様に御由緒有之者壹村開基之者格段舊家之者相調へ可申上旨御觸奉畏私儀右御觸相當り可申哉とも奉存候に付右之通相認指上申候　以上

上助任村

鳥野孫右衛門

酉六月

富永茂右衛門殿

居役人格仰付書

（那賀郡稻垣克彌氏所藏）

西川益之亟

五人組共へ申渡

尻杭百姓辰藏儀平素心得方宜敷既此度武器御手傳銀聊なから調進被仰付度旨願出之段神妙之至尤之事被思召候依之格段之御評を以騙出御家來居役人格に御指置被仰付旨申渡候

十一月廿六日

紬着用御免書

（那賀郡吹田儀平氏所藏）

覺

那賀郡富岡町御銀主

吹田與右衛門

右之者儀此度銀子三拾貫目指上永〳〵八人御扶持方被下置候樣書付を以申出候段承屆候件之通被仰付候尤御銀主御用相勤候内紬着用御免被成候條此段可被申付候　以上

六月廿三日

入國當時藩士祿高

（德島市那波利貞氏所藏阿波古記錄抄出）

蓬庵樣天正拾三乙酉歲御入國以後慶長貳丁酉歲御家中拜知高

一九千三百七拾八石八斗余　内五百石左馬允勘忍分被遣

修理若名　稻田小八郎

一五千五百四拾貳石　内五百石林圖書被遣

道閑養子後内膳　林與右衛門

一三千五百九拾三石六合

仁尾右京先祖　益田内膳

一五千貳百五拾四石七斗余

右近若名　中村藤兵衛

一八千五百拾石九斗貳升三合五勺

和泉先祖　細山主水

一四千石

内藏助先祖　樋口内藏助

一三千五百石

主計先祖　長谷川兵庫

一貳千五百石

民部先祖　山崎六郎右衛門

一貳千三百貳拾五石九斗三升

後志摩　森小七郎

一五百石

甚五兵衛先祖　森甚五兵衛

一百　石　甚太夫先祖　森　九市郎
一貳千五百壹石貳斗　縫殿先祖　長江源右衛門
一三百石　右同斷　長江彌三郎
一貳千八拾貳石八斗八升　田宮先祖　寺澤彌次右衛門
一貳百石　半太夫先祖　梯　次郎助
一千七百拾九石七斗七升　勘解由先祖　稻田四郎左衛門
一千五百石　慶長三五月二十二日五百石加增合貳千石　一學先祖　蜂須賀彦次郎
一千五百石　佐渡半兵衛先祖　待木半兵衛
一千　石　尾關源左衛門
一貳百石　尾關左七郎
一百五拾石　尾關藤七郎
一貳百石　谷口孫八先祖　蜂須賀與三右衛門
一五百拾五石　與次右衛門先祖　樋口分右衛門

一百六拾石　善兵衛先祖　坪井十兵衛
一五百石　大谷六太夫養父　北條七郎
一四百五拾石　源兵衛先祖　伏屋太郎作
一五百石　六郎右衛門先祖　井村清左衛門
一五百石　源五左衛門先祖　速水助右衛門
一五百九拾壹石貳斗　次郎兵衛先祖　市原三左衛門
一五百五拾石　只之亟先祖　眞殿傳內
一五百五拾石　與右衛門先祖　長田久右衛門
一五百五拾石　佐渡九右衛門
一五百拾石貳斗五升　青山庄八
一貳百八拾九石五斗七升六合三勺　次郎右衛門先祖　赤川喜太郎
一四百石　稻次右衛門先祖　田川忠右衛門
一六百石　十左衛門先祖　武市十藏
一三百五拾石余　彌平次先祖　里村太郎右衛門
一五百石

一四百五拾石　平助先祖　和田新右衛門
一三百五拾石
一四百石
一貳百五拾石　庄右衛門先祖　松植平左衛門
一三百石　新五先祖　前田右衛門作
一五百石　安東次兵衛
一三百石　平藏先祖　生駒平三郎
一三百石　森介兵衛
一五百石　敷川源太兵衛先祖　稻富清八郎
一三百五拾石　角兵衛先祖　津田庄三郎
一三百五石貳斗六升　權太左衛門先祖　谷源太郎
一貳百石　勘四郎先祖　太田彦六
一貳百五拾石　平太兵衛先祖　瀧筑後
一三百石　仁七郎先祖　林石見入道
長右衛門先祖　太多和七右衛門

一四百石　左太右衛門先祖　森万助
一五百八石貳斗七升七合四勺　龜之亟先祖　太田茂兵衛
一四百石　民左衛門先祖　小南與次郎
一四百石　半兵衛先祖　片山左吉
一貳百五拾石　克右衛門先祖　井後新次郎
一貳百石　茂右衛門先祖　大口平次郎
一貳百石　孫右衛門先祖　鄉司傳三郎
一貳百壹石五斗三升　岩田七左衛門
一百五拾石　六左衛門先祖　渡邊七右衛門
一百　石　佐野甚左衛門先祖　閑色入道
一百貳拾七石四斗八升　仁右衛門先祖　栗田十助
一貳百石　權之亟先祖　平野與八郎
一百五拾七石貳斗三升　與三右衛門先祖　梯九藏
一百　石　八兵衛先祖　齋藤四郎右衛門

一貳百五拾石
一貳百石
一百五拾石
一貳百貳拾貳石貳斗五升
一五拾石
一五拾石
一百三拾石
一三百五拾石
一貳百貳石六升
一五拾石
一四拾石
一百四拾石
一八百石
一貳千八石貳斗八升貳合九勺

大曾根甚右衛門先祖　林　次郎右衛門
民澤三右衛門先祖　梶浦三郎右衛門
甚太兵衛先祖　福家又右衛門
九右衛門先祖　山崎金十郎
内海彌右衛門先祖　赤澤新兵衛
谷川六兵衛先祖　津田九郎兵衛
津田小平太
小一右衛門先祖　落合甚太郎
左次兵衛先祖　津田與兵衛
忠右衛門先祖　昆野久右衛門
喜多野新右衛門
佐右衛門先祖　大田孫左衛門
關右衛門先祖　岩田五左衛門
三郎兵衛先祖　稻田忠兵衛

一五百石
一五百石
一貳百石
一千七百壹石六升四勺
一百　石
一七拾石
一七拾石
一百　石
一八拾石
一百　石
一百　石
一八拾石
一四百拾壹石五斗九升八合
一百三拾石

半次先祖　野村勘十郎
力左衛門先祖　山田八藏
平兵衛先祖　安田左一郎
○○先祖　倉知彌右衛門
渡邊市左衛門
安右衛門先祖　補本七郎右衛門
三郎九郎先祖　原小左衛門
左一右衛門先祖　原彌八郎
十郎右衛門先祖　尾崎勘左衛門
左六兵衛先祖　平瀨十右衛門
清水茂助先祖　平尾平兵衛
與兵衛先祖　川村與五郎
黑部理助
山田平七

一千三百貳拾八石壹斗八升　又右衛門先祖　牛田掃部
一貳千八石六升五合　涙人　野口孫六郎
一六千五百七拾七石余　豐後父　益田宮内
一貳百石　同人室
内百石長江彌三郎へ加增同百石渡邊市左衛門へ遣也
一貳百石　山川彌六
一百貳拾石　横坂孫兵衛
一百五拾石　左助先祖　涙人　江口新藏
一五百石　益田彌次右衛門
一千　石　兼松一郎右衛門
一四百石　片田庄左衛門
一六百石　涙人　黑部清右衛門
一六百石　野間忠介
一四百五拾石　河井惣左衛門

一七百石　五十君三右衛門
一四百石　森治内
一五石石余　田川新右衛門
一五百石　定兵衛先祖　涙人　加藤甚兵衛
一四百石　林喜兵衛
一六百石　涙人　山崎茂左衛門
一四百石　太郎左衛門先祖　赤堀十右衛門
一三百石　河井新助
一四百石　森本傳八郎
一四百石　子三郎亟　涙人　木金七兵衛
一三百石　水野三四郎
一貳百石　瀧彌左衛門
一貳百石　子三四郎　川口兵助
一貳百石　森本飛彈

一貳百石　益田覺右衛門
一五百石　堀才藏
一五百石　柏木庄左衛門
一貳百石　安閑寺道半入道
一三百石　井關喜左衛門
一三百五拾石　山口先祖武市十藏
一五百石　立木金左衛門
一四百石　二郎右衛門若名
一三百五拾石　涙人辻善七
一貳百石　森吉内
一貳百石　内匠隱居松原三休
一貳百五拾石　伏屋忠左衛門
一貳百石余　篠岡平左衛門
一貳百石　涙人高畠太郎助
益田庄兵衛

一四百七石余　涙人新川四郎兵衛
一貳百石　了意入道
一七拾石　梶浦藤六
一三百石　見代涙人島新五郎
一百　石　小北長助
一百五拾石　栗田半左衛門
一貳百五拾石　古川與助
一貳百石　河崎作右衛門
一百五拾石　後百石加增　内藤甚右衛門
一百五拾石　内山平左衛門
一貳百拾石　益田助三郎
一三百石　武部十藏次に加る筈八彌先祖中條三十郎
一百六拾石余　陰山久助
一百三拾石　鈴木長兵衛

一貳百石　渡邊平六
一百　石　浪人　白江源助
一百五拾四石七斗壹升九合　八田彌助
一七拾石　後五石加增　增田李右衛門
一五拾石　安藤甚助
一百　石　森一左衛門入道
一三拾石　長山與右衛門
一百五拾石　後五拾石加增　謳永右衛門次郎
一貳百石　井村小兵衛
一百五拾石余　井關一郎左衛門
一四拾貳石　古高太郎右衛門
一四拾石　石川與九郎
一貳百石　浪人　小松原半六
一貳百五拾石　堀越清兵衛

一百五拾九石　梯彦左衛門入道
一百　石　井關源次郎
一貳百石　浪人　生駒次郎兵衛
一百石余　長谷川宗十郎
一七拾石　彌田安右衛門
一五拾石　江田彌兵衛
一貳百石　吉原次右衛門
一三百石　長谷川紋次郎
一四百石　後次男　稻田又八郎
一三百石　安閑寺九郎左衛門
一五百石　息加藤次代々浪人　吉川豐右衛門
一三百五拾石　前田次兵衛
一百　石　切腹被仰付候　淺野才助
一貳百石　位田半次郎

一百　石
一貳百石
一貳百石
一百　石
一百三拾石
一百　石
一五拾石余
一四拾石
一貳拾三石
一五拾石
一四拾石
一三拾石
一百　石
一百三拾石余

道通（ヵ）
阿野源次郎
不破又右衛門
大船加右衛門
八村善兵衛
吉村善助
稻田主計
清水太郎右衛門
長谷川又右衛門
若山小右衛門
佐々小助
ばいらい又兵衛
青田九郎左衛門
田中九郎右衛門

息權平代浪人

一四拾石
一四拾石
一五拾石
一拾五石
一三拾五石
一三拾石
一四拾石
一貳拾石
一貳百石
一三百石
一七百石
一三百石
一百九拾八石
一貳百石

西野右馬
井關源内
和田三郎
久次郎
梯源兵衛
梯仁右衛門
太田彦兵衛
梯藤左衛門
岩田兵次郎
岩田清蔵
武藤與左衛門
武藤小次郎
長谷川源七郎
武藤才次郎

一三百石
一三百石
一貳百石
一五百石
一八拾石
一百　石
一貳百拾五石五斗
一貳百石
一三百拾四石壹斗
一三百石
一百　石
一百六石
一貳百九石
一百五拾石余

原　善左衛門
小崎兵三郎
益田久左衛門
古田佐助
鐵治勘七
甚八先祖
佐野助九郎
坪田久右衛門
穗積彌一右衛門
矢田源太郎
不破勘左衛門
太田太郎八
陰山助八郎
岡崎九郎三郎
菁山助次郎

一貳千石
一三百石
一貳百石
一百　石
一九拾石
一八拾石
一八拾石
一百　石
一三百石
一貳百五拾石
一貳百石
一五百石
一貳百石
一貳百石

吉浦彌太郎
吉浦理右衛門
立原彌平次
原　庄三郎
石坂兵左衛門
伊與路六太夫
安井彥九郎
京　養清
深尾庄兵衛
中野藤左衛門
浪人
山崎四郎右衛門
益田太郎三郎
五十君勝次郎
內田孫兵衛

一百五拾石　黒部忠三郎
一千八拾貳石三斗八升貳合二勺　毛利兵橘
一五拾石　大工宗兵衛
一七拾石　同新九郎
一五拾石　同六右衛門
一五拾石　同與七郎
一五拾石　回彦左衛門
一貳拾石　同九郎兵衛
一六拾石　同又太夫
一貳拾石　舟大工與惣左衛門
一拾五石　同市太夫
一百六石　眞殿傳内取次
一九拾石　岡田甚左衛門取次
一三拾石　佐渡九左衛門取次
一四拾五石　五十君三右衛門取次
一百五石　田川忠右衛門取次
一百五拾石　速水助右衛門取次
一五百五拾石　福聚寺
一百石　光明院
一百石　慈光院
一百石　瑞岩寺
一貳拾石　桂國寺
一貳拾石　大瀧寺
一貳拾石　鶴林寺
一拾五石　見性寺
一拾石　地藏寺
一拾石　本福寺
一拾石　建治寺

一貳拾石　藏　○　○

以上

慶長貳丁酉二月十日

官祿定則

（德島市長尾覺氏所藏）

（明治三年）

正五位	大參事	現米	三百四十石
從五位	權大參事	仝	二百七十石
正六位	少參事	仝	二百石
正七位		仝	八十石
從七位	大属	仝	六十七石
正八位	權大属	仝	五十石
從八位	少属	仝	三十三石
正九位	權少属	仝	二十六石
從九位	史生	仝	二十石
大初位	准史生	仝	十五石
少初位	判任出仕	仝	十二石
等外分二級	上級	仝	十石
	下級	仝	七石

一官祿被下方持祿有之分は實數に指繼き定則通り被下候事尤官祿より持祿の數多き分及同數の分は增減無之事

一持祿幾口俸幾石被下有之向在職中は一人口に付年中現米一石八斗に引直し候事

一官祿は閏月を省き一ヶ年の月數に割合每月廿二日より三日の間區別し相渡可申事

尤拜命　免職轉任等十五日前後を以て月半ヶ月の分を可定事

但持祿を以て奉任の向も在職中は渡方本文同斷の事

一官祿正五位より從六位迄は三分一米を以被下餘は金を以被下正七位より以下は米金共申出次第被下候尤都合に寄候ては何とも悉皆米或は金を以て可被下候且金渡しは本月朔日十日廿日平均拂米相場を以て渡可申事

但前同斷尤持祿千石は四分の一百石は三分の一米を以被下餘は本文同斷

一何れの地より職務拜命すと雖も其職を奉ぜざる間は官祿不被下候事

一准する官祿は本官四分の三心得勤は三分の二試補に半數を被下候事

一出仕官祿は委任官判任官共其下等を以被下候事

但少初位は相當表の通に候事

一持祿有之者の子弟は其等級本官の半祿被下候事

万一受取過等有之節は速に返納可致事

一持祿無之輩在職中病死候節は三ヶ月分の官祿下され候事

右之通確定候事

戊午十月

會計局

藩制に付分限解放申付書

今般藩制被　仰出士族卒之外別に不可有級之御主意に就而は市中身居人之義總而解放取左之通申付候事

（勝浦郡　奥服又三氏所藏）

但士族といへとも歸農御指許に相成候懸に候得者平民に相成度志願之者有之におゐては其趣可願出撿議之上願之通可申付候事

一御銀主

一本人帶刀御免

一本人惣領帶刀御免

一次男又は三男帶刀御免之類

右は自今丁付卒申付本人總領帶刀指免年寄管轄申付候事

但當人生涯之義は次男三男帶刀免許之類是迄之通申付候事

丁附卒　軍役壹人

壹人役　錢五貫文

右夏は六月晦日迄冬は十一月晦日迄両季に半數宛上納之事

辛未正月　民政掛

村役人解放觸書

（名西郡林省吾氏所藏）

今般改正に付左書役員を除之外大庄屋與頭庄屋庄屋五人與取立其餘舊御郡代處以來村々おゐて申付有之役員總而一先解放申付候條此段不洩樣可觸知候事

明治　辛未三月

民政掛
大里長
同補
里長
同補
水利總裁判

里長其他給祿表

（名西郡林省吾氏所藏）

里長
同補

給祿表

現米八石
現米六石
右半從官賜之半併合村中償之

現米三石
右都而割賦たるへし

辛未三月

與頭
民政掛

身居人解放申付書

（名西郡林省吾氏所藏）

今般藩制被
仰出士族卒之外別に不可有級之御主意に就而は在々身居人之義總而解放更に左之通申付候事
但士族と雖歸農御指許に相成候懸に候へは平民に相成度志願之者及郡付卒に申付候者之中にも軍役之都合に因村付卒に相成度志願之者等於有之は其趣可願出撿議之上願之通可申付候事

一小高取
右は自今卒に申付小高之義は總而被召上更左之割合之通禄米を以賜候事
從前被下高之正所務八石以上八石五石以上五石三石以上三石一石以上一石其以下金を以賜

一小高取格

一御建置浪人

一郡付浪人
一三領壹匹
一壹領壹匹
一支配外無役人
一小高取小家
一郷付銃卒
右は自今郷付卒申付一家夫役帶刀指免大里長管轄候事
但子弟別家之節は百姓たるへき事
一小高取格小家
一御建置浪人小家
一郡付浪人小家
一御銀主
一無役人
一本人總領苗字帶刀夫役御免人

一苗字帶刀夫役御免人
一郷付浪人
一郷士原士舊家來
一夫役脇指御免人
一夫役御免人加子役御免人之類
一苗字帶刀先規奉公人
一先規奉公人權下奉公人之類
右は自今村附卒申付本人總領夫役帶刀指免里長管轄申付候事
但當人生涯之義は夫役引等是迄之通申付候尤先規奉公人共儀は是迄勤來候段々自今總而指免候事
一郷銃卒　舊郷鐵砲
右役解放申付候事
但是迄被下有之切田之義は取調之上名負に可居遣候事
明治三年庚午十二月

座頭の制度

（徳島市坂部城芳氏所藏）

授官　は久我家より許さるものにて京都綾小路佛光寺東へ入る角に職屋敷といへるあり此の所には全國の撿校の上席十人詰め切り其一部は諸務を統轄し他の九人は之れを助役し一部に欠員を生せば順次に操り上くるなり職屋敷は諸國の盲人を取締り且つは盲人の受官の取扱をもなし久我家に申立てゝ授官せしめらる其授官料は撿校は千両、勾當は五百両采名は三百両の定めなり之れを三官といふ次は衆分と稱し十二両、十六両、廿両、廿五両、五十二両に分ちて官を許され皆免許狀を賜ふて人員に制限なし但し衆分は授官料の多少に據り席次を定む

稱号　座頭の稱号に桂方と市派の二つありて桂方は初め桂何と稱し授官のとき何と号す又た市派は初め何也と稱し授官のとき何市と改む之れは久我家の先きに城市の官といへるありて始めて盲人を保護し授官の途を開かれしより久家我にて授官とともに城市の一字宛は両派に襲用せしめらるなり

服制　撿校は法印に準して紫の絹の法衣に綾の袴を穿ち朱塗りの撞木杖を突き勾當は法橋法眼に位して紗の茶色の法衣に綸子の袴を穿ち片撞木の杖を突く宋名は綸子の袴のみにて法衣を着せず衆分は加賀絹の袴と十徳に類せし服の肩、袖、胸、臂、其他所々に菊桐の紋を縫附けし裝束を爲す之れは職屋敷より特に渡さるゝなり

撿校　は國内の古參の一人か支配頭となり惣て坐頭を取締り年頭には支配頭のみ両若徒杖持、手ひき、中啓持の五人を連れて登城し平素は各撿校ともに藩主又は御連枝の姫君に琴を教授し藩主の法要には支配頭の撿校出頭して頓寫の式中に平家物語などの琵琶を彈奏するを例とす

勾當と采名　藩主の法要には二三人つゝ撿校に隨行し琵琶の彈奏を唱和するを務めとす

苗字一刀　他藩にては撿校勾當采名に扶持支配を給せられしも阿波にては其事なし但し衆分以上には苗字一刀を許さるも一刀は手引きに帶ひさしむる定めなり

坐元　衆分の内より二人を撰ひ撿校を助けて坐頭の事を掌どり留銀の配當其他の勘定をなす尤も坐元は宅勤めにて御弓組御鉄砲組等の隱居を筆者に雇ひ事を執らしむ大抵一日廿人つゝの座頭は座元の家に來り諸方の吉凶を聞き留銀を受くる爲め二人宛夫々へ分派す

組頭　之れも衆分より二人を出し座頭の組々の取締をなすなり

横目　亦た衆分より二人を出し座頭の行狀其他を監察し非理非道を戒しむるものとす

職業　惣て盲人の職業は德川家康公時代より鍼治導引琴三味線と定められ眼あきには此の業をなさしめざりしは日本全國の通則なり

留銀　藩主の吉凶には二十里四方の盲人に留銀即ち配當を賜りしも後に十里四方に減せらる其配當は座元より撿校の奥書ある請求書を出し其吉凶の厚薄により人別に對して受くるものにして盲人二人につき一人の手引きを加へて配當せられたり故に國内のみならず初めは紀州讃州より多くの盲人來りしが後々は讃州の近郡と稱して西讃岐よりも來れり尤も高松□に吉凶あれは當地よりも四五人つゝ盲人惣代となりて配當を受けに行きしを例とす

配當取り　高取りの士族も吉凶あれは高百石につき藩札五匁の割りにて受け大小性は二匁五分にて以下二匁、一匁五分、一匁又は五分三分と扶持支配の割りにて士分の外に卒及ひ御奉公人御職人等よりも受く町家は凡そ間口の間數を目安とし農家は其家柄を標準とするも家の貧富又は商事の盛衰により增減あり孰れも配當取りは二人ともに吉凶當日の馳走に與るものとせり

配當を受けぬ家、髮結、湯屋、渡し守り、桶屋、石切屋、青屋（古物を染直す藍染屋）及ひ番所等よりは一切配當を受けす人の賤しむ業なるを以て穢れありとなすなり故に若し留銀を受け吳れぬときは孰れも其家の恥とする習ひあり

法會　譬へは法華宗の御影講又は眞言宗の正御影供其他各宗の法會には盲者十人つゝ行きて齋を食し且つ配當をも受くる定めなり

配當金　御維新前までは阿波にて撿校三人、勾當六人、采名二人衆分は八十人程ありて配當は大抵一ヶ年衆分は藩札二百目位い采名は其二倍、勾當は其三倍撿校は其四倍の收入なりき

旅行　授官の盲人は旅行は久我家の許狀を示せは孰れの宿驛にても無料にて宿泊せしめて次の宿へ送り吳れ且つ小遣いとて銀十匁を渡し吳れるは全國ともに一定せしなり

右者幼少のときより師道につき聞き及ひしことを述ふ尤も淡路は阿波と同樣なりし趣きなり

坂部城芳（七十四歳）

祿制一斑

（徳島市　長尾覺氏所藏）

第一　祿の種別と與奪

阿波藩士にして祿を藩主より受くるもの大抵家老は四千石以上一万五千石に及び中老は四百石以上三千石物頭は四五百石寄舍席は三百石内外にて組士は五百石以下高取諸奉行は百石以下とす之れを御家中と云ふ藩主の家内と同一なりとの意味にして昔日譜代家來を家の子と呼しが如し祿とは家祿の謂にして俗に祿高又は御高（おたか）と云ふ故に受祿の藩士を祿持（ろくもち）又は高取（たかとり）と稱す而して家祿は世襲にして賣買を許さす故に父退隱せんとするには藩主に請ふて其子に家督相續を命せらる之れを向（かう）

後名代（ごめうだい）と云ふ若し嗣子なくして死せは廢家して祿を沒收す故に死するに臨んては豫め嫡子又は養子を定め家名相續を出願して死す之れを願置と云ふ若し願置（ねがひおき）を爲さすして死せは嫡子ありと雖も家祿を沒收し又は減祿せらる其他罪ありて祿を奪ひ又は賞罰增減するは一に藩主の予奪に在り

第二　御判物と定役

祿高には知行と藏米との二種ありて知行を賜ふには藩主より在判の文憑（用紙引合竪二つ折）及人付目錄（用紙程村竪紙）を交付せらる之れを御判物と云ふ其文大樣左の如し但し藩主の判は黑或は靑を用ゆ將軍のみ朱印を用ゆるを以て御朱印と云へり

分國阿波之內（又は淡路之內於何ヶ所（又は何郡の內何村）高何千何百何拾何石何斗何升（目祿人付在別紙）事右爲堪忍分遣之條可令全所務之狀如件

年　号　月　日　　藩主の諱判

知行高役に入人附目錄　　何野某とのへ

一高何千何百何拾何石何斗　何郡之內何村

人數何人

內何人　　本百姓

何人　　奉公人

何人　　子兄弟下人

但頭六拾歲より下十五歲之間役に入分

年　号　月　日　　藩主の諱判

而して藏米は多く割增高又は新規召出し高取諸奉行に賜ふものにして左の如く國老より御藏奉行充の文憑を發し之れを受祿者に交附し藏奉行へ照會するの具とす

覺

高何千何百石何野某へ（爲御加增）被下置候條御藏米三つ物成にして有來通無懈怠可被相渡候仍而如件

年　号　月　日　　國老氏名在判

御藏奉行中

右の知行高に對しては藩主より藏米高に對しては御年寄役より左の如く定役の文憑あり定役とは

軍事又は出役には定めの人數を從へ平時には其人數に對する軍役銀を藩に納め軍備の充實に供す故に軍事出役中は此の納銀を免さる但し家格に據り役數不定又は定役の内何人を許るされ又は增課せらるゝものあり

知行高何千何百何拾石此役何人半也仍定所如件（用紙程村竪紙）

年　号　月　日　　藩主の諱判

何野某とのへ

覺

高何百何十石　　御定役何人

右は（御加增高）御藏米役相改候處件之通に候條可有其心得候仍而如件

年　号　月　日　　御年寄役連名判

何野某との

藩主治照公（敬翁と号す）大に軍政を改正し軍役を査定し右の定役に對し左の如く指定せらる

御定役　　何之某

何人

一馬　何騎

一兜　何刎

一鐵砲　何挺

一槍　何本（何本持遣）

一馬取　何人（何本長柄）

以上

年　号　月　日　　藩主の諱判

第三　知行の高物成と歩一

知行とは知り行ふの意にて一には地方（おがた）と云ふ區域を限りて其土地及作物住民とも併せ賜るなり故に拜地と云ふ拜領地の中略にて領地とも云ふ是を以て一人にて一村を領有するものは其村境に某の領方とのの標本を建て一小國の觀を爲せしものありたり然れ共土地の沃饒と否とに據り夏秋の收入に增減あり（麥は三石を以て米一石に比するの例なり）即ち知行高の何割何歩何厘を受けと爲す之れを受高（うけだか）と云ふ此の受高に據り知行高を換算せしを高物成と云故に高物成（たかものなり）は知行高の十分の二三より八九に減することあり其沃饒なるものにありては知行高より三倍以上にあたる高物成を得るものあり是等の實收額を所務と稱す此の所務の十分の一を納稅するを歩一と云ふ或は祿高に應

し歩割を増加するものあり尚は別に歩一高の五割卽ち半額を加へて五割増と唱へ納付するものあり之れ全く知行税なり而して地方に據り夫銀札（今の賦役現品の類）及定井料（今の養水費）を課せらるゝものあり然れ共拜地内の未墾地或は藪床の開拓せしを餘所務として收入することあり又藪床の雜竹山野の雜草及ひ藁束の雜收多大なり是等は其地の庄屋藁農取立人を依托し徴收精算せしむるの慣行たり

第四　拜地の特權と住民

上記の如く拜地は領主の有たるを以て其の域内に於ける土地の所有權を農民に指定するを下げ札と云ふ全く領主の特權に屬して他より犯すを得す而も其の土地の賣買質入等は領主之を承認し訴訟紛爭も亦た領主之れを裁定し他領に跨るものは其の領主等と合議し國法を犯すものは村吏先つ領主の承認を得て處理す此の住民を先規拳公人頭入百姓の三種とし孰れも領主に從屬し相續結婚養子別家出家出遊等の人事も皆領主の許諾を得ざれは爲すを得す且つ狩出しと稱して今の徴兵の如く其の子女を家に徴し年限を定めて使役す之れを下司下女と云ふ俗に「はしたを」又は「はしため」と云ふ是れなり或は「はしたもの」又は「おはした」とも云ふ其他賦役と名つけ時を限り日を定め領主の邸内等に出て雜役に服せしむ若し拜地に神官あらは召して神事に預らしめ僧徒あらは佛事に參せしむること猶ほ夫役の如く領主の權遂に社寺に及ぶ斯くの如く藩士にして土地を領有し特權を行ふもの他藩には多く類例を見すと云ふ

第五　藏米と指紙

藏米とは藩の倉庫より支給するを以て云ふ幕臣等の倉米は俵高にて稱するも舊藩にては知行高と同しく石高を以て唱ふ而して之れを新知高と云ふ藩の新開墾地の所得を給するの意なり故に其高の三分の一を以て支給す之れを三つ物成と唱ふ素より定役銀を徴するも歩一及ひ五割増等を課せず其の物成りを折半して一つを米券とし毎十一月朔日に御藏奉行より交付し殘り一半を麥券と爲し毎六月朔日に仝所より交付せらる尤も麥は米の三倍に當るものを以てす之れを指紙（さしがみ）と稱す御藏所付（どころ）農民の貢租を納むる米麥に代用を許し兼て指紙問屋を指定し賣買を紹介せしむ依て需要供給の關係より時價に高低を生す故を以て問屋は素より賣る藩士も買ふ農民も此間多少投機的動作を免れすと雖も爲めに藩庫は座して出納を簡にし民間の金融を疏通する事最も多大なりき

第六　家祿の變遷

藩祖家政公の入國より蜂須賀家創業二三世の間に在りては若し藩士の家督繼承者が幼年なる時は暫く父の家祿を沒收し特に人割（にんわり）扶持（ふち）と稱し其家族臣從の人數に應し男は一日米五合女は同く三合

の割を以て扶持し毎月現米を藩の倉庫より交付し家主の長するを待つて家祿を還付するの例なりしも或は才藝技倆なしとして減祿し其他種々の名を以て家祿を減殺し拜地を轉換して黜陟陶汰せしも藩政緒に着くに及んで是れ等の事なく實子なきものを絶家せし例も漸く養子相續の途を開かれ繼承者の長幼能否に論なく祿高は全く世襲のものとなれり然れ共藩の用度不足せは藩士家祿を半減し年を限りて半を藩用に充つるに至る之を半所務と云ふ少は祿高の十分の一より多きは十分の六七を收する事あり是を以て藩士も亦拜地に對し一二年の貢租を先納せしめて支出を補ふ斯くの如くして上下因襲を爲す而も中古家老の嫡子出て〻就職すれは支祿二千石次子以下の出仕には全く千石中老には二百五十石物頭には二百石を支給するの慣例あり國用益す欠乏して半所務愈よ頻發す重喜公之れを釐革せんとし職班官祿の制を定め職の輕重を以て班の進退を爲し以て家祿の濫制を防かんとして行はれさりしも爲に家老以下物頭の支祿の例は漸く減するに至れり

第七　明治新政後の家祿

明治の新法を布かるゝに及び其二年二月初めて兵制を改め藩士の等級を變更し七月に祿制を改革す家老を一等士族とし現米千石中老を二等士族とし全く二百石物頭は三等一百石組士は四等五十石に均一した但藏米百石以下實收五十石に充たさるものは三十五石とし從來の拜地祿高を返還せしめ各現米を以て藩の倉庫より給與することゝなれり尋て藩知事に屬するものゝ祿制を定め家令は三等士七十石家扶は四等士五十石近習も四等士にして三十五石とす三年十二月藩知事の家祿を二万百四十八石と爲し家令を六十石用人近習頭を五十石近習用役を二十六石と爲し以て四年七月の廢藩置縣に及ふ五年より貢租は半金半米となりしを以て家祿も亦半は現米に半は貢租石代に準し現金の支給と爲る六年家祿の石高を京升九五八七七を以て換算することに改められ七年より家祿は惣て貢米代を支給せらるゝことゝなり且つ家祿に對する約十分の一の祿稅を課せらる是れより先き家祿奉還の內議あり有志の徒は祿族両つなから奉還して營業資本の交付を受くるものあり六年十二月家祿賞典祿百石未滿の奉還を許され尋て年限給の奉還をも許さる七年三月家祿の內割奉還の制を定められ仝月家祿引換公債証書發行條例を布かれ十一月百石以上の家祿奉還を許され八年六月割奉還を止められ一月惣ての奉還を止めらる九月家祿を改めて金祿とし明治五年より七年に至る貢米代平均額を以て金祿に改定せらる九年八月金祿公債証書發行條例を定められ翌十年より順次金祿公債証書を交付せられ以て家祿制度の終局を告く

右は父丹次家記及ひ附屬書類より摘錄す（長尾覺）

（徳島市　長尾覺氏所藏）

諸代家來とは組士以上の家に數代扶持支配を給して召し抱へ其家族は惣て其主人に臣從し藩吏及び郡市役人の轄外に在るものにして藩政革正當時解放を命せられし諸達の要領等左の如し

一明治二巳年六月廿日御家中の面々高或は扶持支配指遣有之候諸代家來並諸代に無之とも扶持支配指遣有之分夫々相認め來る廿五日迄に申し出つべく候此段相達候事

一仝年七月十一日、此度被仰出に付家來御扶助奉願向は人員姓名住所身居等肩書に致並扶持或は暇指遣候向は同斷中折堅帳に仕立來る晦日限指出可申事

一仝年九月廿九日兼て御扶助願置候義聞屆けられ夫々扶持支配被定銃卒に被仰付候に付仝年十月十一日隊長岡崎輔引渡申候

一仝年九月廿三日此度諸代家來之儀は惣て解放し身居之義は鄕は銃卒と相唱へ家來之義は惣て召仕と唱可申事

一仝三庚午年閏十月四日昨年士族舊諸代家來御解放召仕居候者名面申出にも相成居候得共今般市鄕戸籍編製に付紛雜に相成差支候廉有之候に付當時召仕居申者名面住居の郡村且つ指遣有之扶持支配とも書付を以て來る十五日迄に可申出事

一同四辛未年三月廿八日召之儀壹人扶持不足之者解放致べく候事

一此の前後に於て三等士族即ち物頭以上にては自分の家祿を割きて特に御扶助を願ひ聞屆られて銃卒に編入せらる諸代家來なり

其他は主從相談ふて解放せしものもありて自然家來又は召仕と稱するもの無之に到れり

右は長尾丹次代中諸代家來解放等始末控より摘要す（長尾覺）

參考目錄

御家中島割帳	德島市	猪口繁太郎氏	
年寄五人組解放に付達書	仝	森政一氏	
伍長勤務方心得達書	仝	仝	
町年寄五人組解放達書	仝	仝	
大里長申付通達並請書	仝	仝	
御儒者御醫師仲間扶持方御支配帳	仝	神河庚藏氏	

慶長二年分限帳　仝　曾我部道夫氏
寛文五年分限帳　仝　仝
家督指遣書　仝　馬詰梶五郎氏
阿波國古記錄　仝　那波利貞氏
分限帳　仝　福田宇中氏
藩士住所家祿氏名　仝　山内時行氏
明治二年官制一覽表　仝　清瀨正衛氏
小高取申付覺書　仝　阿部萬三郎氏
扶持差遣書　仝　美馬文章氏
御手伸仕仰付並讓渡証文　仝　藤本圓藏氏
御両國無足以下分限帳　仝　侯爵蜂須賀家
御両國分限帳　仝　仝
飛彈樣御家來客御帳　仝　仝
手長所新開覺書　仝　梶浦圭二氏

步懸被返下步一被召上御達書　名東郡　富永久基氏
勤務年數申出覺　仝　藤田牧太郎氏
御扶持方御支配增加申上覺　仝　仝
呼出狀　仝　仝
年頭御目見仰付　仝　後藤捷一氏
郡付涙人申付覺書　仝　仝
蜂須賀家政公御墨付　仝　武藤常太郎氏
鄉士格仰付覺書　仝　手塚房子氏
小高取申付覺書　仝　仝
苗字帶刀差免覺書　仝　谷類次氏
郡付涙人覺書　勝浦郡　豐田明貫氏
郡付涙人被仰付覺書　仝　平岡國太郎氏
支配外無役人申付覺　仝　仝
居屋敷高增加下知書　仝　友兼豐太郎氏
御目見被仰付覺書　仝　仝

小高取被仰付覺書　仝
郷付浪人申付覺書　仝
慶長二年分限帳　仝
江戸出仕申聞書　仝
郷鉄炮の者名面高帳　仝
支配外無役人申付覺　仝
小高取格申付書寫　仝
阿淡御両國御家中分限帳　仝
大里長補申付書　仝
大里長申付書　仝
名字帶刀申付書　仝
一領一疋申付覺書　仝
夫役苗字帶刀差免書　仝
殘扶持方米代渡通　仝

仝　富永功氏
仝　多田昌正氏
仝　福瓦理平氏
仝
仝
仝
仝
仝　長田象二氏
仝
仝
仝　長尾要二氏
仝　大平壽氏
仝
仝　中村鄰次氏

殘扶持方仮通　仝
大年寄申付書　仝
番組申付書　仝
役向解放申付書　仝
下調役出仕申付書　仝
士族取扱申付書　仝
大年寄申付書　仝
現米下付御沙汰書　仝
番組受持申付書　仝
郷學肝煎申付書　仝
役儀差免書狀　仝
大年寄順番出勤達書　仝
御用召狀　仝
大神子分高遣沙汰書　仝

仝　吳服又三氏
仝
仝
仝
仝
仝
仝
仝
仝
仝
仝
仝
仝
仝
仝

紺屋司沙汰書　　全
新開高申付書　　全　日比野參次氏
廿六番組頭申付書　　全
郷付涙人申付書　　全　那賀郡　海山關太郎氏
里長申付書　　全　今川起之氏
所役人支配外無役人申付覺書　　全　勘田島太郎氏
郷付涙人申付覺書　　全　仁木助三郎氏
夫役苗字帶刀差免書　　全
御扶持申付書　　全　松村宗吉氏
郡付涙人仰付書　　全　木村丈太郎氏
廿七番組頭申付書　　全
判任出仕申付辭令　　全　森鈴吉氏
民政掛付属申付辭令　　全
大庄屋申付辭令　　全

史生轉任辭令　　全
脇差御免城内御目見被仰付書面　　全　吹田儀平氏
被下置上下差遣に付召喚狀　　全
造酒裁判役辭令書　　全
紬着用差免書　　全
年寄役申付書　　全
御本陣御指免一時手當米辭令　　全
增高並任用御沙汰書寫　　全　鈴江弁吉氏
山奉行役兼帶申付覺寫　　全
苗字帶刀差免書　　全　稻垣克彌氏
脇差差免仰付書寫　　全
城内御目見被仰付覺書　　全
扶持方下付証　　全　吹田榮藏氏
身分取調書　　全　湯淺佐太郎氏

秋本氏成立　仝　秋本嘉太郎氏
小仁宇村廿八番組頭申付書　仝　仝
小仁宇村庄屋五人組勤功認帳　仝　仝
小仁宇村庄屋勤功取調申上覺　仝　仝
家筋成立御調に付書付差上控　仝　仝
家筋書付差上帳　仝　仝
賀島主水様御家來に相成成立帳　仝　仝
土橋雎右衞門跡職被仰出次第書　仝　森　巳二氏
飛彈様より知行申付書狀　仝　仝
苗字帶刀無役人申付覺書　仝　仝
村役人支配外無役人申付覺書　仝　仝
郡付浪人申付書並呼出狀　仝　小林甚平氏
苗字帶刀夫役御免申付覺　仝　澤田熊七氏
御家中分限帳　仝　宮崎寛太郎氏
仝　仝

脇指夫役差免書　仝　仁義李太氏
仝　仝　湯淺淺太郎氏
仝　仝　仁義常太郎氏
仝　仝　湯淺龍平氏
仝　仝　仁義榮吉氏
先祖由緒書申上覺書　仝　湯淺高太郎氏
役儀に付申上覺　仝　仝
小高取申付覺　仝　仝
居屋敷高被下置覺書　仝　仝
建弘二年之境界令　仝　仝
鉄砲打名面差出帳　仝　仝
鉄砲所持の者名面差上帳　仝　仝
身元相調差上帳　仝　仝
組頭庄屋及勤方申付覺書　仝　仝

身居人取調差上帳	仝	仝
庄屋肝煎身元相調差上帳	仝	仝
身居人家督名田取調申上帳	仝	仝
身居人解放御觸書	仝	仝
龍王鍛冶廢止に付御觸	仝	仝
勤年數勤功等相調差上帳	仝	仝
脇差夫役差免覺書	仝	湯淺濱太郎氏
仝	仝	仁義廣太郎氏
仝	仝	湯淺愛藏氏
御用勤方相記帳	仝	勘田島太郎氏
苗字帯刀差免仰付書寫	仝	稻垣克彌氏
申渡書寫	海部郡	池内龜太郎氏
淺川浦取立書の覺	仝	仝
御判形の者成立申上覺	仝	久米芳衛氏

庄屋五人組賄料元建覺	仝	岡田亟太郎氏
元高川成高人別所務調帳	仝	齋藤菊太郎氏
知行差遣狀	仝	猪子玉太郎氏
居屋敷高に付忠鎮公書狀	仝	仝
扶持方仕渡極書の覺	仝	久米隆次郎氏
御目見仰付書	名西郡	島田一二郎氏
村役人支配外無役人申付覺書	仝	仝
武市家成立書	仝	武市昌晋氏
小高取証文	仝	近藤英次郎氏
身元に關する願書	仝	仝
庄屋及奉公人に關する覺書	仝	仝
阿波國武鑑	仝	大粟太郎兵衛氏
無役人覺書	仝	一宮成義氏
郡付浪人申付覺書	仝	仝

御用年限相調差上帳　仝　平尾文太郎氏
大里長其他給祿表　仝　林省吾氏
管轄申付書　仝　仝
庄屋に關する覺書　仝　近藤英次郎氏
家系並身分居願寫　板野郡　中山源次郎氏
御鍛に付申上覺　仝　宮田竹三氏
藍玉制道に付伺上覺　仝　吉田次郎氏
身振願覺　仝　仝
村付卒名面取調帳　仝　仝
先祖成立覺書　阿波郡　井上浪五郎氏
拜領物等の覺書　仝　仝
出頭命令書　麻植郡　工藤源助氏
庄屋取立人差免狀　仝　石原六郎氏
卒申付並移住届書　仝　渡邊菊太郎氏

庄屋役御免願　仝　住友新十郎氏
五人組跡役に付願書　仝　仝
脇差諸小役御免狀　仝　仝
村役人支配外の無役人申付覺　仝　水野泰次氏
地高被下置御下知書付　仝　仝
鄉付浪人申付書　仝　仝
明暦二年御家中分限帳　仝　岩瀨良吾氏
御家中伊呂波寄　仝　仝
苗字帶刀差免書　仝　桑原作兵衛氏
ぬ組伍長申付書　仝　仝
小高取申付覺書　仝　仝
郡付浪人申付覺書　仝　原田好次郎氏
鄉士格申付に關する文書　仝　仝
苗字帶刀差免書　仝　工藤源助氏

御　沙　汰　書

美馬郡德善正一氏
分限名面帳　三好郡喜多平三郎氏
名代仰付申上覺　仝　三木彦一氏
御目見席順定覺　仝　仝
家格仰付願上覺　仝　仝
郷付涙人仰付覺　仝　小角貞太郎氏
伍長申付書　仝　阿佐宇治郎氏

服務

宗門改其他申付覺書

（海部郡青木輝吉氏所藏）

覺

一海部郡牟岐之内於大島吉利支丹宗門爲御政道御番被仰付候條壇懸之船に至迄相改不審成もの於有之度差おさへ置御郡奉行御代官森甚五兵衛方へ可告來事

一御番仕爲御扶持右大島並出波島壹坪に何木に而も壹貳本宛殘置可苅採於此両山畠出來候はゝ被下候條ひらき可申事

一右両島へ何ものにても有付申度と候はゝ肝煎居住可申付候事

右之通何茂年寄中以相談申付候條無油斷御番可相勤者也仍如件

賀島主水（花押）

正保貳年卯月十六日

海部郡之内牟岐村庄屋

七郎兵衛かたへ

（徳島市岩野新平氏所藏手控申抄出）

田畠所持者取扱方達寫

一田畠之義は其地御代官給人裁判に而百姓等相扣候筈之儀故假令何者に候共扣人と相立候而右田畠之義に付而は御代官給人手元に而古來百姓同斷取扱候事に候依之右樣之取扱請候儀難相調程之身振之者は不相扣事に候所近來適心得違之者有之哉に付田畠御林預り人受人之類とも右御建之處申渡候樣先達而御代官之面々へ及下知候然所郡所に而は其身振に而取扱候段御建に振候に付已後田畠之儀に付取扱之儀は前段御建之通取扱可申候隨而大綱左之通可相心得旨郡御奉行へ申渡候條右樣可相心得由御藏奉行へ申達事

一諸士家來又は構浪人類表立其身振に而は田畠所持不相調儀有之候得は若内分扣居申其儀に付諸出入願事有之節は其身振に而申出候而請持不申苗字相省き田地持主何某と仕村役人奥書を請願出候事

一田畠所持仕候儀に付呼出候節は何者に而も田畠主何某として村役人召連出候樣及手配候事

一田畠主に而罷出候節は如何樣之身振に而も其席へは無刀に而罷出候事

一田畠相扣居申其儀に付若不屈有之候而身居へ相懸り申出候節は田畠持主何某實はヶ樣之身居之由可申出事　以上

寛政四子年八月三日被仰渡候

人足御當置米仰付定書

（那賀郡湯淺高太郎氏所藏）

木頭村

定

一江戸御供立人足壹人
　給米三石五斗之外に與内米五斗都合四石相渡候事
　但右與内米五斗は富岡相場を以來る辰の冬郡中割取引に相添相渡し可申事

一右人足不筋之儀有之畢竟役人過料指出候節は小川丈之助方へ引請候事
　並人替り之儀も無指支指出可申事

一人足出奔等之儀有之節は人替何時に而も小川丈之助方より指出候事

一人足之者病死等有之候節は右替り人足指出候儀夫々無指支世話之儀は小川丈之助方へ引請候事
　右彼是雜費之儀は當方より相弁可申事尤成尺手輕く費用相都り候樣相働吳れ候事

一人足御當置米之儀は西方村に而御當置被仰付候樣双方より申上る事

右之通大京原於御本陣に島田次郎左衛門一座に而相定候事

肝煎勤方申付書

（德島市　森政一氏所藏）

一伍長之内一丁内に二人宛丁肝煎申付一ヶ月輪番相勤可申事
　但輪番之人名一ヶ年分あらかしめ申出可置事

勤方心得眼目左之通

一丁内店々賣買方不作法之儀無之樣其餘往來掃除向を始出火用鎭水貯方等惣而丁内に相搆候節年寄を助取究方周旋可致事
一伍中之事は伍長元に而辨すといへとも惣丁内に懸り候御用筋は年寄指圖を受可相勤事
一丁内ゟ申出候御用筋肝煎關係之事件は年寄連名不苦候事

庭役人勤方

（德島市　吉田半三郎氏所藏）

一日々出勤刻限四つ時ゟ罷出可申事
　尤内壹人宛早出可有之候御奉行出勤之節必壹人宛は不居合議無之樣にて相心得事且又納り多く時節等は刻限早罷出名頭共召連打廻り庭出之株々に廉株等無之哉とはなるゝに引合と相改諸事心を付受取方手早く相勤中仕共勤に心を付候而御藏入夜に入ふ申樣相心得事
一御門番水上帳見屆判相濟候得は右帳面受取右案内附之内に而其日庭出に相成候株々手板に書載俵子方之立合候而引合を相濟候得は呼出し可仕旨御奉行之申出右案内附帳之次第を次目通り樣先ゟ拂人壹人宛呼出可申事
　尤何村何々之上納何拾石之株と呼候得は百姓共東ゟ西之通拔候節自分に名相名乘せ可申候事
一呼出相濟候上に而下見分相始め可申旨申出其株々鼻給符に引合を致見合右指拔候品は右夫々之拂人つまを以受させ可申候若又右之内胡亂かましく姓合難相分米等見當り候節は同役共寄合篤と見極候上出入直等付可申候或は不正米亦合米等之類見誤候而受取候におゐては不輕義庭役之者仮儀相立不申事に候間屹と相心得可申事
一案内附之次第順々受取儀には候得とも小數に而徒行送り之分は翌日ゟ延候而は迷惑に成候事故格別に受取可申候且又持込相湊廻送りに相成候得は翌日庭出之株々御役處濟手板に書載指出置申候事
一下見分相濟候得は一株之手板之始に印を入置其處へ鼻繪符を取候而順々に正しくさし入候而指

一出申候右手板相揃上見分指出候節を手板持召れ庭役之者壹人宛様に相詰居候而出入直等之札入候得は其數不間違様相調子相答可申候中仕共ゟ右調子等仕儀堅有之間敷候事

一出入直相極り候得は手板之札に引合と白さい不殘建置直し印入置候而壹俵に右さいを抜取直し之場所え配させ可申候刎俵には悉貳本宛さいを建置入之分には惣杆秤の當り右之内に而輕め俵等相見候分にはつゞ之印いたし置愈輕〻に而廻しに出し申節は貳指宛拔候而猶又貫目相當り可申候其節庭方壹人宛硯を扣罷在繪符に廻俵之一二三之番付いたし右繪符に何村何拾石之株と相記壹俵に而付置可申候右廻し俵之貫目杜秤ゟ相答候得は左之通塗手板に書留指出可申候

何村何拾石　何村何石

何拾何貫何百　何貫何百

右手板御奉行ゟ指出候上一二三之番附之通り廻し場へ俵出させ順々に配置目通りに而壹俵三貫目相覺可申候右手板之表に書記處之貫目に引合無相違候へは右手板下け申事故其上に而廻しに取懸可申候事

但廻し之儀は何拾石之株たりとも拾石に壹俵之宛廻し俵指書可申事尤百姓願に而廻し數に願出候得は其旨兼而相極め杜秤當り足候後俵動し申儀有之間敷事

一廻し俵に過有之節は拔戻し候事に候然所庭役者心懸薄麁畧に相勤候處ゟ再廻し俵出させ候得は同貫目に而大に欠に相成候儀抔毎事有之候是等之儀は全庭役之者越度に候得とも諸事不案内に而相來候様に茂相見候故只今迄之儀は抱置向後心得之義申渡事に候條何れ茂厚相心得可相勤候其子細は同貫目に而過不足と大に違異は何分子細無之而は不叶事候或米之乾濕又は繩俵厚薄等相違有之事候右様之所へ心を付重に相調子可申事に候依之同貫目に而廻し俵雖決節ゟ同役打寄致評儀候上に而廻し俵指出候様全躰御用方大切に可相勤候右様申渡置候上に而心懸薄此後同貫目に而大に過と欠と相違之儀等於有之は屹と可遂吟味事に候條兼而此旨相心得罷在諸事心懸厚可相勤候勿論再廻し候而も同様於有之は子細無之事

一刎俵有之候而件之通貳本を以建置候分は廻し場南之方え壹所に相集出米帳に株々村名石數迄茂相記候上墨打を可申等御奉行へ申出候上御門番立合右村々拂人呼出し見屆候所に而壹時に墨打を可申候右墨打候俵之儀は本仲仕共は取扱無用に候右之通御門番ゟ相知らせ置候上は右石數御門持出候處見屆相改候は御門番勤口に候

一直し俵之分は拔出直し之場へ配置せ翌日亦は大數に候得は二三日之内直し出來次第夫々庭出可申付候直しに相成候俵子四五日を過候迄庭出致延引候儀は無子細候而は不相調候直し欠抔と申

立上納大に及遲滯候儀は猶次不相調儀に候條案内附帳を以時々相しらべ可有吟味候且又直し不
一宜候得は再三直し申付儀を有之候得共右樣之儀毎事有之候而は百姓共日數逗留にも相成且又欠
も多出來彼是下迷惑成事に候へ共可成程は再直し無之樣諸分念入させ可申事に候依之先達而か
申付有之通右直し手傳致候者並女日雇迄名書記指出申儀近頃猥に相見候間向後無間違名書出さ
せ可申候万一直しに手を拔候而不直米麥等見分に指出候においては幾人有之候共右手傳之者共
一屹と咎申付儀に候條兼而此旨相心得させ置可申事
一見分之節何石何斗何升等鼻繪符には書記有之候得共丸俵之分迄手板に指入半は見分に不指出追
而壹都〳〵に半米として指出候樣に相成來候依之鼻繪符に引合不申候故此後は何程端有之候共鼻
繪符之表有狀に一株に手板に指出可申候廻し之節は其株々に而右半米何斗何升に延ひ懸何斗何
升何合之納りと升之上明に相答可申候其上に而壹つに相都〳〵五斗に足り候得は本俵に直し畢竟
壹つ之半俵には右升目月日迄茂相記繪符付置可申候右之通取扱候へは一日に壹人宛ならては半
俵不致出來事に候條右半俵之分は相溜り次第見合半都〳〵可仕旨申出候而皆々取出し本俵に都置
可申候右樣半都いたし候得は自然に明俵出來候事に候得は明俵帳に相記俵子方え指出置可申事
一廻し場に而升目見屆候共庭役第一之御用に候處多は相損候者抔相勤來樣相見ゆ候此後之儀は本

役之者隨分心を用無油斷可相勤候且亦只今迄は何升何合有之旨申迄之儀相答候迄に而欠之員數
不相分候故此後は俵子方に而右欠相極候上廻し俵之次第書載候手板に右欠員數俵子方か書入指
出置口打計らせ候節右廻し之村に次第正敷申出候上に而計らせ可申候事
一欠米上見分に損出之儀只今迄は中仕共手板に入指出來候故何村之欠と言儀茂不相分候此後は團
を入庭役之者致持參何村之欠と可申出候過等之儀は右指之者抔相當り候儀に而候
一廻に計候砌塵多有之儀も相見候團を用ひさせ可申候事
一他國俵之儀は勿論其余常に異俵特込候節は早速引せ可申候假令内に入候品は正敷候共右樣之俵
御藏内に而致取扱茂有之間敷候且亦地俵に而茂俵振麁抹に成節は俵直し節行着かわかへ可申付
一事惣而口打計らせ候儀は名頭共壹人宛添正敷計らせ可申候別而大豆計方之儀は廻し場にて計候
同斷一粒懸に間違無之樣計らせ候儀相心得可申半口打せ候節は必名頭壹人宛相添其株に取違無
之樣念入させ可申事
一何に寄らず袋入に而持込候品五斗已上に候へは俵に仕立候上壹俵に一指宛見分に指出可申事
一口打相齊候上は五石宛に配上け其日に納り石數何拾何石何斗何升と都〳〵上塗手板に書記候而御
奉行ゟ指出可申候其節何番之御藏ゟ入何百何拾石入候而も書記可申候左之通

米何拾何石　　内何番御蔵入
麥拾何石　　外何番御蔵入

一　右之通書載指出可申事

右納り石數しらへ方之儀は庭役之内壹人宛其日に根取役相極置帳元之者〻都上ケ之處承合候而相仕出可申事俵子方に而仕立承合候儀に而は無之候事

一惣而納をは五石配御蔵出俵は拾石と相心得可申事

一惣而御蔵出俵之内に鼠切乱俵等有之引替候儀願出候節は俵子方ゟ其旨申述御奉行承屈之上に而引替遣可申事其外惣而御蔵出入候

一俵子方申談万事不致齟齬樣可相勤候

一御蔵入之砌根取之庭役は配之場處に罷在壹人は御藏口に相詰勤名頭共何れも罷出中仕働方に心を付麁抹無之樣相勤させ可申事

一土穂調子方之儀は先達而書附を以申渡し置候事右書附此帳面に相添往々不相崩樣相勤可申候

一上納米に亦米多相交候に付別に申付候節出米に相成候而は迷惑成申に付撰立上納仕度段拂人共願出候節は右願人召れ其と御奉行ゟ相願候上申渡次第に可申付事

一納り多節は五七日或は十日程に見振候而御蔵入前中仕下中仕共其日出勤之者名面相記指出旨候而致着到可申事

右之外御近火並風留出水等之御早速罷出御手當相勤方等之儀は先達而見及候帳面之通諸事相心得可申候近年勤方心得區々に相成居候處此度相改右言付相渡條は無油斷可相勤事

寛政九丁巳年閏七月

何村何拾石　　何村何石
何拾何貫何百　　何貫何百

右手板御奉行へ指出し候上一二三之番附之通り廻し場へ俵出させ順々に配置目通りに而壹俵に貫目に引合無相違候へ共右手板下け申事故其上に而廻しに取懸可申事

（名東郡五寶翁太郎氏所藏）

御馬御用勤方記錄

御馬御用勤居之定め

手控心覺委敷は表扣に有之惣而元治元年控始己來御馬之儀惣而岩田上田両家ゟ御任被仰付候に付諸事此後勤方の極り之心覺

一奥小姓乗方役御馬御預之義両人申談鷺の御間へ出勤両流乗方役相考召連御馬掛出坐に而割合し
御預り致壹應御厩迄持歸り請書尚又乗方役を以御馬掛に差出追而表呼懸にて御預被仰付候事
但右席に両流乗方役召連候義は(以下不明)
一若殿　御稽古(巳下不明)
一可奉伺義は御(巳下不明)
一御両殿様御召之儀は乗置之所時々相伺思召を以被仰付候事
一御打毬等之節時々御目付方手紙を以表御出有之事
但其節御家中馬両人手馬當りにて數々差上候事
一買上之御馬是又時々見立可申上事
一内於御馬場御家中馬御覽等に極候節は□□御直し被仰付候得はどこへと申遣す不及□乗方役を
以どこ々馬御門配申遣筈之事
一江戸其外御馬地方ゟ着之節早々案内有之候事
一新流其外拜借馬を惣而御馬懸りゟ両人之内へ噂有之時に相調差出渡候事
一御厩支(巳下不明)中間欠字

數に御馬之内御役人内ゟ直願に而拜借之義有之其節は御馬懸ゟ時々指支不申哉之旨手紙にて申
越御厩渡方手配是ゟ外御厩ゟ可申遣筈之事
一御厩支に付御預馬之節は飼料左之通壹疋に付被下候事

大豆	壹升	飼葉	壹〆
ぬか	五升	わら	壹束三歩

右之通被下候事
其節洗ひ塩迄付候事
右飼料請取之義は左書之通に而毎月朔日十一日二十一日十日分受取候事

手馬　姓名印
飼料請取通
御厩方

右御預馬委細表扣有之
一江戸表ゟ御馬參候節添持參候義も有之

一毎月十四日廿四日両度外御厩に御簾之者稽古一所に夫々之御馬當物に參候筈之事
一調練之度毎御召御馬を始口數馬とも乘方役召連當物として參り候樣被仰付候事
一御家中馬（巳下不明）
一御調上に被仰付候節は尚又御馬懸りゟ左書之通に而御調被仰付旨手紙を以申來候事
一新流へ相渡候口馬之義も御預御極り成候得は同斷御馬懸ゟ文通有之筈之事
一新馬其余駒□□之儀も時々御馬懸りを以て被仰付又は御直にも被仰付候筈之事
一無格之面々馬之儀如何樣之馬たりとも於内御馬場御覽不被遊候御筈外御厩にて見分之上相懸之馬にて御用立候樣之馬に候得は御下馬なり又は御調上け之上入御覽候事
但御家中馬之義は御直に被仰付次第入御覽候事
其節御門配乘方役を以御目付へ申出させ候事
一江戸表其外御馬着之上足解之節は壹両日前御馬懸迄足解仕候旨申上相願候事
但時とし
御直にも申上候事
一足解之節時々御馬懸出張可申事

一何によらす新さ（巳下不明）
一大毛出生之駒（中門欠字不明）御國印被仰付候御筈之事
㊞御印
右は七左衛門存付を以形差指上至極之御　之旨御馬懸を以被仰付候事
一外御厩大御繕に付左書之御馬前同斷御預け被仰付候事
淺瀬　白瀧　黛　布引　翠麟
右は手前之方
風蹄　凌雲　三笠　花山　千年
右は但馬殿方
一大毛御印之儀前顯達有之御厩目付へは是ゟ申達筈御馬懸りより御厩目付へも達置可申　筈之事
翌朝御厩目付へ七左衛門ゟ達候事
両家へ
一御預置之御馬之内御役人内一枚札に而奉願拜領之節直に面々迄請取人差出候得は相渡候筈之事
但御馬懸りゟ右之段文通両人當に而同集へ被下候旨申來候事

一津田新五左衛門ゟ乘方役呼懸御両殿様御召物口數馬其余御家中當分御預馬毛取調早々差出候様
達旨乘方役申出候より不取敢指圖いたし遣候得共是は御馬懸り達間違に而候張右等之所両人之
内へ噂無之候而は右相成候節後に達違之節爲押合留置候事
一御調上け御馬始入御覽(中間不明)懸にて入御覽候事
一御馬場休日
五節句
七月十三四五御休
極月大之月は廿七日迄
小月は廿六日迄年内三日之御休
正月五日ゟ始り之御定め
一但馬殿両人とも毎月二日御用引被仰付五節は登城可仕事
一切手脇御門此後御目付ゟ配に相成通行之事
但家來迄は通し不申居候之事
一御馬江戸表ゟ御調御牽せに被仰付着案内有之候得は翌朝御厩へ牽付見分馬醫方へも見分申付其
旨御馬懸りへ乘方役を以指出させ候事萬一雨天之節は御送り見分之事
一着御馬初而
御両殿様　御覽之節は両人付添乘方役召連御前へ罷出候筈事
一正月元日
御乘初之儀御相馬又は御名代も申付候事御相馬被仰付候節は(二三字欠損)御馬懸ゟ呼懸文通有
之旨御達に相成候事
御相馬
上に被召候上直に御厩口御馬出しより乘出中禮
上を向廻し候事
上御置被遊候を見上け直に置元之所へ乘入る御式迄も夫々御乘始濟於御馬見所御相馬之面々迄
御目見被仰付御長熨斗被下右御三寶に御切熨斗被下拜領可仕事
上御入　に極候節は御馬懸之側に御三寶御差出しに付御入之通拜領之事
御用相勤不申面々御厩目付乘方役御厩方面々至る迄も御切熨斗拜領被下候事
右は歸後之事

御相馬相勤候者は前顯御目見之節御三寶被下御長のし御切のしとも被下右萬事相濟候得は直に
御乘始恐悦御年寄へ詰所にて可申上候事
乘馬服のし目馬乘上下恐悦申上候節は紋付之事
冬內明元日何時
御乘始之旨御馬懸ゟ手紙を以申來候事
一御乘初之節及御馬懸出張候事
御乘始御用相勤候節御表御禮御用引に相成候事
但し委細は表控に有之御帳付有之節は尙又御用支之名札差そへ人々へ相賴可申筈之事
一御厩諸方建數
內御厩　拾五正建
五正建別段申出置有之
一鷲御門內　五正建
一外　四拾三騎建
一北　拾八正建

一同前　拾三騎建
一森宋右衞門方　五正建
是は他國ゟ參候者引當
一御馬懸り自筆を以若殿樣ゟ御內意御相談被仰付候義も時々有之請書御答可申上筈之事
一御參勤御供馬御先馬とも數取極め候樣御馬懸以被仰付候事
但乘方役申談取極申上候事
大毛行
一父馬之義御厩目付ゟ申出に付其懸御馬懸迄懸合に及毛付取撰乘方役を以差上候事
右毛付
風蹄　發春　風早
右發春御馬病馬に付御拜領御馬父馬控に申出置候事
一兼而被仰付置候大毛御印
二月七日より入始候事
一二月は

南方百姓共ゟ願に寄父馬拜借願出則當年ゟ御式に被遣候御筈に而諸事両人被仰付候筈之所但馬殿京都へ爲御使者罷越候より七左衛門へ被仰付御郡代稲田幾太郎へ七左衛門申談兎も角も可致旨被仰付候而則申談候事尤御馬懸りを以被仰付候事

右父馬風蹄村雨之御馬相撰申上通被仰付候事

右御飼料を始其余之儀は御厩目付へ御郡代申談候樣爲仕度候旨御馬懸へ申出直に御馬懸より厩目付を以御達相成候事

慶應元七月廿六日

一於御前御直に七左衛門壹人御人拂に而被仰付候は組士當今時會心得方何分思召に少々相違の御事も被爲有右御内御用被仰付惣而騎馬隊に被仰付度御思召に付先拾四五人計に而も劔槍馬上稽古爲仕尤新流に被仰付候御事に候聊不被爲在但馬申談程能相調稽古爲仕先々御用立候樣之道相考可申上候旨被仰付則御請申上但馬殿申談委曲御直に追而存寄申上候筈

一西尾丹下馬鹿毛

若殿樣ゟ御望被爲有候御旨御直に被仰付御下馬被下候樣申上則御馬懸内談仕置候事

一乘方役出精に應し拜領もの内願仕置候所内々懸合御馬懸ゟ有之候事

御馬御拂之内に而も被下候御道如何と申出致置候事

一御厩御法御取改御厩目付申談存寄相立御馬懸へ申出候筈之事

一乘方役御馬隨意に致候節御懸合ゟ懸合に而乘方役覺書差出候由に付右聞濟之義申出置候事

一上田但馬殿田中民之助在番之義内願之通夫々相片着在番被仰出候事

七月廿八日

被召

御直に被仰付候は

兼而被仰付置候騎馬隊之義但馬殿申談之通御尋之如く夫々申上候所各面々長に相立貳拾四人位之所にして奉御覽入候樣被仰付御覽に入方之儀は御年寄内膳殿へ懸合候樣被仰付則翌廿九日奉御覽入候事

申上候通は前々騎馬調練之通両流別々に被仰付候而は申談も行屆かたく候に付両流一所之外御厩に而被仰付度段奉申上候至極之御意に而難有御請申上右に付直に仕舞掛但馬殿へ參相談之上名面取極候事

いつれ被仰付方は前々騎射同樣に被仰付度候事

若殿樣御稽古日に御差合に相成不申樣外御厩に而被仰付旨之御願
但是又至極之御沙汰に而左候得は折々御覽も被遊候樣之御沙汰に候事

社寺

豐林寺境內社領並禁制

（侯爵峰須賀家所藏
御代々樣御書寫中抄出）

北巖山豐林寺境內四至傍示
東八幡之馬場限西林限南櫻馬場外之道限北林二目外堀限竹木等永代莫他妨予嘗地奉建立處也住持之僧勤行無怠可奉祈國家安全然上者守護此寺處永傳子孫者冢門盛德山高日昇萬福是膺矣此外社領二百石於別所令寄附也仍爲後證如件

寛永十二乙亥暦三月十六日　　豐富朝臣峰須賀入道家政（花押）

禁制

一殺生之事
一竹木伐採事付放牛馬事
一罪者走入事

右條々於違背族者忽可據嚴科者也

寛永十二年三月十六日　　龍嚴上人御房

（御判）

南方四郡聖家へ申付狀

（侯爵蜂須賀家所藏 御代々様御書寫抄出）

南方四郡聖家衆中上下今度被相改書付具令披見候淸僧衆は勿論彌被守法意僧行可被相嗜事可爲尤由兼々可被申渡候然は凡僧中之儀は自今以後令還俗耕作一篇之可有覺期候然上は人を化度布施之物を於被取は可爲曲事候是亦具に可被渡儀專一に候爲其如此候恐々謹言

蓬庵公

一十二月廿日

江南

泉福寺

御同宿中

大工宮式作法申上書

（德島市立石成人氏所藏）

一大工共神社遷宮之砌職儀に付藤原姓を受領して家名實名書記棟札納事

一大工職致相續候得者代々相勤爲宮式之事

一宮式之儀由緒有之者又は弟子に而も讓遣致相續儀は是又可有事

一宮再興普請之節宮式大工絶果難相知節は其節棟梁相極普請出來棟上遷宮時節に至宮式方ゟ不申發候得は右棟梁遷宮相勤其節ゟ宮式大工と相極事

持明院堺内竹木伐取制禁制札

（德島市善福寺所藏）

定　持明院

當寺山從先規定來堺目之内におゐて大小によらす石ほりとり並竹木伐取候儀堅令停止者也

寛永四年三月十八日　忠鎭　花押

燒山寺堺内竹木伐取制禁制札

（名西郡笠井法蓮氏所藏）

定　燒山寺境目東は横道より上南は機道切西はくつぬき限北は横道より上之竹木伐採者於有之は曲事可被仰付之條堅政道可被仰付者也仍如件

寛永拾八年三月五日　森左太右衛門尉花押　益田主殿佐花押　宥源法印

切支丹宗禁制制札

（板野郡吉田次郎氏所藏）

條々

一伴天連並切支丹宗門之族異國より日本渡海之沙汰近年無之間自然相忍密々差渡輩可有之事

一先年異國江被差遣之南蠻人之子共伴天連に仕立企有之由此以前渡海之伴天連共申之條其子孫の伴天連ど成り候もの日本船を作り日本人の妻をまなひ日本のことは

一異國船近年四季共に渡海自由たるの間浦々の義は不及申在ゟ處々に至まて常々無油斷心を申付見出し聞出し申出は其咎をゆるしい御ふほうひの上乘渡船荷物共に出へし縱彼宗門たりとも於可被下之一隱置悔日伴天連又は同船の輩等之拷問之上はいかくれあるへか

一切支丹宗門就御改度々御法度書籍以此度被爲仰聞御趣承知仕奉得其意候事

宗門改に付代換誓紙

（美馬郡武田浦三郎氏所藏）

宗門前書之事

一私貳視は無御座候事

兄弟妻子共切支丹宗門に而東墻山西福寺檀那に而

一私貳親兄弟緣者親類知音牢人又は商人其外不寄何者に他國ゟ罷越候とも宗門相改不審存候者は遂穿鑿一宿をも爲仕申間敷事

御座候は

一私共召仕申男女宗門不審成者抱置申間敷事

一切支丹宗門之者並宗門不審成者於有之は仮令親子弟不寄何者早速其時御奉行所へ可申上義以此已來右之宗門之者御座候は其時之御都代御奉行所へ御注進可申上事

右條々於相背は忝茂天罰起請文之事

奉始上天連帝釋四大天王下者堅牢地神難陀跋難陀龍王鎭守八大竜王宿曜日加茂下上稻荷祇園松尾平野愛宕伊豆箱根隱岐熊野三所權現三島大明神惣し而大日本國中大小神祇別而當國一宮二宮等各神罰蒙其身ノ上ニ現世而者受白癩黑癩罪病ヲ後生者墜無間地獄ニ浮世更ニ不可有之者也仍而起請文如件

文政二己卯年八月廿二日

切支丹宗禁制制札

（板野郡吉田次郎氏所藏）

條々

一伴天連並切支丹宗門之族異國より日本渡海之沙汰近年無之間自然相忍密々差渡輩可有之事

一先年異國江被差遣之南蠻人之子共伴天連に仕立企有之由此以前渡海之伴天連共申之條其子孫の伴天連ど成り候もの日本船を作り日本人の妻をまなひ日本のことは

一異國船近年四季共に渡海自由たるの間浦々の義は不及申在ゟ處々に至まて常々無油斷心を申付見出し聞出し申出は其咎をゆるしい御ふほうひの上乘渡船荷物共に出へし縱彼宗門たりとも於可被下之一隱置悔日伴天連又は同船の輩等之拷問之上はいかくれあるへか

右條々海上見渡す所之番之者は勿論船之輩其外之者に至迄念を入見出し聞出し拳行所仍下知如件

正德四年十二月日　奉行

一外人ゟ遷宮相勤儀職儀作法に無之事

一別當神主氏子共勝手を以普請外人へ相賴候共職儀作法に候得は普請出來之上遷宮之場に至當時之棟梁大工ゟ宮式方へ相斷遷宮相勤させ候義勿論之事

右之通大工宮式之儀成米書付指上候樣に被仰出奉畏右ヶ條之通唯今迄作法相立御座候御尋に付右之段申上候　以上

承應元年十月

立石五兵衛
美馬十兵衛

長谷川越前
山田豐前
賀島主水

大工宮式只今成來之儀書付を以申出候ヶ條之趣令披見候往々書付之通相極置尤時々梯夫左衛門篠原庄左衛門へ可相達候　以上

極月

立石五兵衛殿
美馬十兵衛殿

門首門下出入裁許覺書

（阿波郡瀧本眞海氏所藏）

覺

一其方ゟ阿波郡西林村西福寺門首門下之出入遂吟味候處に西福寺儀は明王院門下に相極理運に聞屆候條可得其意候御横目井村助右衛門出座證文遣者也

延寶二年寅四月十一日

賀島半右衛門㊞
林　帶刀㊞
蜂須賀一學㊞

阿波郡伊澤村之内谷島
明王院かたへ

澁野村新藏院へ申渡覺書

（勝浦郡二山敬重氏所藏）

澁野村新藏院申渡覺

一新藏院義　逢庵様御入國之節ゟ爲　御意　御新願寺に被　仰付長谷川越前殿御仕置之節紺屋町裏にて屋敷被下候得共惡水付之所故自力に普請難仕差上候所重而相應之地有之候はゝ相願候へゝ被仰付澁野村住居可仕旨申上諸役御赦免被遊居申候然共遠方に而御上之御新禱御用並公用難相勤迷惑仕候依之名東郡南濱浦之内石井理と申所に下々下畠所持仕候彼所へ引越法用相勤澁野村は隱居所に仕度旨願出候に付南濱浦並近在所とも相鍛候所何之障無之に付願之通申付候間勝手次第普請可被仕候

正德三己年七月廿五日

西彌次郎

大山權現舊記取調申上書

（海部郡岡部清一氏所藏）

壇深村に十二社權現有之右所年古半鐘有之並枯木相倒居申由右半鐘枯木之由來定而可有之候十二社權現之儀神社帳を以相調候所不相見地名に候哉又は社有候事哉別當社人附にも候得は來（曆）も可相知哉右夫々由來且百姓承傳へ或は相定り候成來筋も有之候はゝ右旁々之事迄委敷相行着書附を以急々可申出候　以上

十二月廿二日

稲田武七郎
高園村與頭庄屋
近藤平四郎方へ

右之通舊臘被仰付候所下拙儀病氣に付此節迄延引に相成候急々右由來枯木之長廻り並半鐘之儀繪

圖に相認銘も則書入百姓共之申傳之儀も有之候はゝ夫々委敷書附且別當之手元へも申達神躰之譯
迄委細に書附來る十日迄に持參可有之候急々御用候條少も油斷有之間敷候

正月五日

近藤平四郎
盛深村庄屋
清藏殿

申上覺

當村に十二社權現有之右所に年古半鐘有之並枯木相倒居申由右半鐘枯木之由來十二社權現之儀神
社帳御調被遊候得共相見不申地名に候哉又は社有候事哉別當社人附に候得者來(暦)も可相知哉何
分夫々由來且百姓承傳へ或は相崇候成來筋も有之候はゝ右等之事迄委敷相行着書附を以急々申上
候樣被爲仰付奉畏候當村大山權現往古は十二社權現と申候由承傳候得共只今一社に而御座候尤往
古は村拵も宜敷家數も多御座候由申傳候得共古き儀故申傳迄に而何之證據も無御座候勿論右一社
迄に而外に社も無御座候並地名に而も無御座候往古は坊數十貳坊有之候由申傳權現境内に右坊屋
敷跡御座候得共只今に而は小笹萱しだ生茂り居申候右別當大瀧山藤野坊と申候而十貳坊之本坊に
而御座候由申傳右藤野坊は大瀧山成福寺と申眞言宗に而則當村旦那寺に而宍喰浦大日寺末寺に而
御座候中古以來當村極々困窮仕家數漸拾六軒御座候右之仕合往古之申傳には大に相違仕殊に別當
成福寺其外共何之證據書物等も無御座候社人之儀は往古は數人有候旨申傳候得共只今に而は無御
座社人子孫之者も無御座候

一權現御神躰御長七寸束帶之姿壹躰
　但土にて作立候樣相見申候其外神躰數々御座候得共皆々相損姿相分不申候其内御面像四つ御座
　候右御神躰皆々土に而作候樣相見申候尤右社度々出火有候其節相損候由申傳候並社内に壹尺五
　寸廻り程之丸石壹つ往古より有候旨申傳今以社内に御座候

一權現社地より北に當り六丁程所相隔萩川と申傳候川御座候並八丁程相隔鳥居坂と申傳候坂御座候
　尤只今鳥居は無御座申傳迄に而御座候

一權現に年古半鐘壹つ御座候右半鐘往古より有候と申傳候迄に而年數は相知不申候則右半鐘繪圖に
　仕寸法共左に書記指上申候右半鐘之銘も繪圖に書込指上申候

一枯木壹本相倒居申候是又年數相知不申候並何之木と申儀も相分不申候慶長年中之大汐之節も右
　倒木往古より倒居申旨申傳候由今以申傳候
　右倒木長廻とも左之通御座候

一倒木　元口六尺五寸廻り
中程に而四尺廻り
末口　貳尺廻り

但皮目無御座雨されに相成居申候

右之通只今之姿申傳等書附指上申候相崇候成來筋之儀只今に而は相分不申候右旁奉申上候　以上

海部郡擂深村庄屋
清　藏
同村五人組
喜　助

寛政辰年に相當り候樣相見申候
辰　正　月

高園村與頭庄屋
近藤平四郎殿
奉申上覺

當村大山樣現舊記書寫先達而德島御役所樣へ奉指上候通猶又寫仕指上候樣被　仰付奉畏別帳面に

相認奉指上候右之通書附を以奉申上候
文政十三寅年九月　以上

擂深村庄屋行代
勘右衛門

海部郡賀
御郡代樣御手代
高田道之助殿

願書直當指許書
覺

（阿波郡瀧本眞海氏所藏）

阿波郡伊澤村
明王院

右は御巡見使御用御入目銀之内ゟ金子指上候段奇特之心得尤之事に候依之此後諸願紙面御郡代令直當候樣申付候

十二月十八日

右之通御當職御書附を以被仰渡候に付令寫指遣者也

天保九戌年十二月

赤川三郎右衛門㊞

伊澤村

明王院

諸寺院僧侶風儀取究申達書寫

（名東郡後藤種太郎氏所藏御觸狀之寫中抄出）

諸寺院之僧侶不律不如法之義に付先達公儀御觸も有之候得共近年風儀不宜御制禁等相犯候僧も有之自然旦家者不歸依に相成候得共自分之不德を不顧施物相貪法用勤方差略仕候趣且諸宗之內鄉分は眞言宗多有之所近頃弟子法緣等申立若僧へ住職附屬仕候樣相聞

公儀御掟に難相叶畢竟右樣之若僧住職仕候義不律之義相生候樣可相運就而は唯今住職仕候者は其儘に指置已後は左書之通取究候樣可有了簡旨町御奉行御郡代之面々へ可被申聞旨元〆中申達候事

一諸寺院住職之儀

公義御掟之通一宗之法式存知之者に而も歳三拾歳未滿之僧を願出候とも不承屆事

但知德才學抽候僧は右年齡に不拘本寺結衆ゟ別段書付を以て願出候得は品にゟ評議可有之事

一其宗門學問修行晝夜怠慢不可有事

一朝暮勤行如法可相勤事

一嗣法附屬之義は器量を相撰み兼而御法度之通金錢を以後住之契約仕間敷事

但一向宗之儀は自弟に附屬仕義故住寺年齡には不拘候得とも宗意未熟之僧は後見看坊等相定法用不指支樣相心得可申事

一不律不如法之聞万一有之候得は本寺結衆屆可申出事

一堂塔破壞不仕樣修覆相加建立相心懸可申事

一檀家之佛事作善念入令修行不作法有之間敷事

一飲食衣体之美麗を好間敷事

一酒宴遊興仕間敷事

尙々寺院へは其本寺老分ゟ通達に付所役ゟ申繼に不及事

天保十亥年九月十八日

蓮花寺修繕願書

（三好郡安宅喜市氏所藏）

乍恐奉願上覺

當村蓮花寺本堂及大破再建に取懸居申處少檀家に而諸事難行屆に付而は操興行仕右助力を以成就仕度奉存當五月奉願上候處早速御聞屆被仰付難有奉畏去月十七日ゟ相始候處始終雨天打續彼是諸造用等相成居申義に御座候付而は明二月座本源之亟相雇晴天十三日之間操興行仕諸人助力を以成就仕度奉存候誠に再應奉願上段奉恐入候儀に御座候得共前顯奉申上通少檀家に付至極迷惑仕候何卒御慈悲之上此段御聞屆被爲仰付被遣候得者本堂成就仕檀家一統之者共重々難有仕合奉存候右之趣可然樣被仰付可被下候　以上

天保十四卯年九月廿九日

池田村蓮花寺檀家總代百姓

万　次　㊞

同町々人同

岩　助　㊞

美馬三好

御郡代樣御手代

郡　禎　次　郎　殿

横　井　鶴　藏　殿

右之通當村蓮花寺旦家總代之者共奉願上候旨趣相違無御座候付而は何卒御慈悲之上右奉願上通御聞屆被爲仰付被遣候得者一統之者共重々難有仕合奉存候右之趣可然樣被仰上可被下候　以上

卯　九　月

池田村與頭庄屋　近　藤　孫　平　㊞

同　町　年　寄　和　田　傳　右　衛　門　㊞

同　　　　　　　眞　野　傳　吉　㊞

同町五人組　江　口　助　次　郎　㊞

同　　　　　和　右　衛　門　㊞

同　　　　　豊　太　郎　㊞

同　　　　　德　太　郎　㊞

同　　　　　乙　藏　㊞

同村五人與　正　木　和　兵　衛　㊞

同　　惣　左　衛　門　㊞

同　　賀　之　助　㊞

同　源　蔵㊞
同　柳左衛門㊞
郡頼次郎殿
横井鶴蔵殿

（勝浦郡六寸寺所蔵）

天神本社修覆御下知書寫

此中郷村天神社本社幣殿拜殿瑞籬共燒失後再興之儀度々願出先達而仕樣積相仕立候右社之儀は御銀歩通被下候場所之義故御入目高之内五歩通可被下哉之旨申出候得共御取約之御場合にて指延相成候に付氏子共自力を以て假家に出來候所最早及大破候に付ては此度氏子共申談本社之儀は先格々少々寸法減少成候而も御普請に被仰付被下候得者幣殿拜殿瑞籬並惣石垣共下々相仕立往々氏子共自力に修覆可仕乍併御建立處之儀故御紋付瓦に相仕立度旨願出候段受持御郡代添書を以申出候隨而見分仕樣遂手配候樣御作事方へ被相達候所本社之儀は御元居り向作り四尺四方軒高八尺五寸之仕立之所此度少々寸法相減向之間三尺八寸五歩桁行三尺五寸丸柱七臺建に出來繪圖面積書之通御大工申出候再興之儀彼是願出候段も無據運且本社之儀に候得は此度御手普請に被仰付度右御入目積之内付紙之通木品相行着重々減略を以被仰付度則御入目左書之通相成候尤幣殿拜殿瑞籬總石垣共往々迄自力に仕候樣瓦御紋付に相仕立候而も御元居仕居へ置候得者混雜に相及候儀は無之旁右願之通被仰付度旨一卷相添委曲御作事奉行之面々申出候書付共遂披見夫々申出候通左書御入目を以出來之儀承屆候條此段御申聞可有手配旨本〆中申達事

一銀札壹貫百七拾七匁三分五厘

本社柱長押船撥破風共栂にて出來坐板杉並板にて出來積付紙減少御入目

内三百九拾目三厘

御材木屋御調置御口木等相用候木代

殘而

七百八拾七匁三分貳厘當時御入目　以上

（海部郡岡部清一氏所藏）

半鐘倒木取調申上書

申上る覺

一海部郡撫深村大山權現半鐘倒木之儀に付極月廿三日に御林方御代官樣御手代森彌十郎殿右爲御

用御越被成半鐘之有姿繪圖に相仕立被成倒木之儀は去る巳年三月に阿波志編集御用之帳面之通
に相仕立指上候通書印相認御歸被成候右之段書附を以御注進可申上候　以上

辰正月五日

盡深村庄屋　清　藏
同村五人組　紀　助

高圖組頭庄屋
近藤平次郎殿

御添簡願上覺書寫

（海部郡佐藤幸雄氏所藏）

乍恐奉願覺

私儀是迄無官にて罷在候所先代各官職仕御座候事故何卒此度上京仕吉田において官職仕度奉存候
右に付而は京都ゟ御添簡被爲仰付被下候はゝ難有仕合奉存候右之段書付を以奉願上候　以上

卯二月

若松村神主
長太夫

海部郡賀
御郡代樣御手代
田野甫右衛門殿

右は當村神主長太夫奉願上通被爲仰付被下候はゝ於私共に茂難有仕合奉存候依而奥書仕奉指上
候　以上

卯二月

同村庄屋　〃　田次左衛門
同村五人組　政　藏
同　萬　藏

田野甫右衛門殿

野諷經勤行願上書

（那賀郡縫垣克彌氏所藏）

乍恐奉願上覺

一拙僧儀名東郡下八万村密禪比丘弟子に而御座候然所生得病身に御座候に付那賀郡椿村庵地に居
住仕法用相勤罷在候此度
乾亨院樣御法事於興源寺に當月六日ゟ九日迄御執行御結願十日寅の上刻御葬禮被爲遊候に付右

村金剛寺下福井村組頭庄屋森佐賀次ゟ組村相結指上候帳面に相洩申旨を以如何仕相洩候哉委曲申上候樣被仰付之御趣奉承知候則拙僧儀右金剛寺舊跡庵地に住居仕罷在候右金剛寺安永五申年棟附御改之節椿村役人共庵地に附上寺号相消ゟ申趣其後　憲德院樣御葬禮御執行被爲遊候御砌にも組頭庄屋ゟ指上申候帳面に相洩申居に付其節御尋被遊候に付椿村肝煎武田縫次親五兵衛勤之節御役所樣ゟ罷出棟附御帳に庵地與相居り寺号消へ申旨申上御座候所此度御尋被遊候者憲德院樣御當座之節不參之趣申上御座候御趣森佐賀次方へ御書被爲下候由奉承知候拙僧義右庵地に住居仕居申儀に御座候得者疾右樣之儀奉承知候得は寺号相建候樣奉願上儀に御座候得共近頃右庵地ゟ罷越申儀故先年ゟ之運ひ不奉存願送仕候此節野諷經罷出相勤申度奉存候御聞屆被爲下候得は法衣に相叶難有仕合奉存候尚又棟附御帳金剛寺と御引戻し被爲下候樣奉願上候尤此段之儀は猶追而紙面を以奉願上儀に御座候得共先此段之義も申上候右之段被聞召屆被下候得は難有奉存候　以上

名東郡下八万村密譚比丘弟子
那賀郡椿村
哲賢

酉十二月

那賀
御郡代樣御手代
富永七兵衛殿
岸本伊右衛門殿
横井紋平殿
木村儀左衛門殿
橋本林左衛門殿
小川岡之助殿
岸禎助殿

以上
椿村肝煎　武田縫次印
同村五人與　儀兵衛印
同　良左衛門印
同　岩左衛門印
同　瀬右衛門印
同　岩次印

右之通哲賢奉願上に付奥書仕奉指上候

十二月

富永七兵衛殿
岸本伊右衛門殿
横井紋平殿
木村儀右衛門殿
橋本林左衛門殿
小川岡之助殿
岸　禎助殿

八幡宮神體取調書

（那賀郡瀧彌平氏所藏）

西河内村玉木八幡宮御神體御疼之廉々御尋に付申上覺

應神天皇

御束帶に相違無御座候尤往古より之御鎮座にて自然御疼に相成候哉難定候得共御冠之巾子切落候樣相見へ甲はかり相殘袍之御袖も中程より切落候樣相見尤針跡等御座に左右二柱之御儀も大底同樣相見へ申候右有姿演舌書を以申上候

以上

十月十四日

木本薩摩

八田麻五郎樣

（麻植郡住友新十郎氏所藏）

遊行上人廻國に付觸書

覺

一此度遊行上人廻國に付於御當地寺町持王院宿坊に被仰付候右寺之義番所等出來に付彌以門外境目共狹有之候然所郷中參詣人大勢相つとひ候て喧嘩口論等不埒可有之候左候へは上人本意にも被相叶間布義に候就夫志有之參詣人之儀は各別猥に右宿坊へ入込右往左往無之樣に可仕候右之趣郷中庄屋共方ゟ夫々堅可申聞候志も無之見物雷通に罷出不埒之義於有之は不及言郷中役人共品にゟ越度に可申付候郷中家業等相懈候而は畢竟難儀之事に候尤志之者參詣仕候而諸事不作法に無之相極候樣に夫々可申付候　以上

右之通御當職ゟ被仰出候條堅相守候樣に面々と村中不限何者逐々可相觸候此狀奉承知旨印加へ無滯相廻し相濟村ゟ早々可指戻候　以上

下條成助
生田辨左衛門

卯七月廿九日

名東、名西、麻植　　佐坂新右衛門

三郡與頭庄屋方へ

右之通御觸被遊に付寫し相達申候右御觸之趣不限何者夫々可被申付候尤右御觸之趣奉承知旨印形加へ相濟村ゟ此方へ可被指戻候　以上

東川田村與頭庄屋　住友慶之亟

卯七月廿九日

組村々庄屋五人與中

右御觸之趣被仰聞承知仕候私共組中不殘相觸參詣仕者不作法無之樣に逸々可申聞候依之承知之旨私共印形仕候　以上

卯八月朔日

五人組　喜兵衛㊞
同　次兵衛㊞
同　市兵衛㊞
同　金右衛門㊞

庄屋　平兵衛殿

同　庄助㊞
小頭　二郎右衛門㊞
同　紋右衛門㊞

此御觸村々相廻し承知印取此方へ可指戻候東五人與小頭へ前々觸事ゆき屆不申候夫々行屆候樣に可仕候　以上

治右衛門殿　庄屋

一高札今日出來仕候明日は立可申候先日申談候通竹なわくへ木持せ明日枕木へ御出可有御手前には明日いのしりへ參候間隨分はやく御立樣可有候　以上

次右衛門に申遣候庄助庄兵衛方へは音吉ゟ可申聞候

杉尾大明神舊記　（勝浦郡大平壽氏所藏）

御高九百四拾七石八斗八升九合御藏一圓

但村境の儀は江田大松北は大松三軒屋並大谷へも相懸り居申候西は大谷村方上村南は本庄村

並前原村ゟも相懸居申候

一田六拾町九畝三歩

一畠拾六町八反六畝六歩

産物米麥菜種其外雜穀

一家數百三拾五軒

同　三　軒　部　屋

同　拾　軒　他郷ゟ來人

同　五　軒　見　懸　人

同　五　軒　先規奉公人

同　百拾壹軒　百　姓

同　壹　軒　神　主

一正一位杉尾大明神　神主　富川石見

但神事料米八斗被下置候

御建立所にて神事祭禮九月九日にて御座候右社内並麓袋振と申古社床壹反被下置高地にて先年より竹木御伐せ不被成候尤御修覆の節右御林内に而松檜等御伐せ被成候儀も御座候將亦蓬庵樣並

至鎭樣ゟ御制札被爲下置御座候御制札の御表左之通

禁　制

杉木尾山八丁之内

一竹木伐採事

一殺生事

右之條々相背者は於有之者忽可所罪科者也

慶長七暦九月三日　蓬　庵（御書判）

掟

杉尾山此の已前蓬庵以御制札被留置候其旨無相違愈自今以後令禁制條堅申附可候若違背之輩於有之候可所嚴科者也　至　鎭（御書判）

慶長十八暦十月六日

掟

袋ふるい林壹反餘當行者也

慶長十八暦十月二日

増田主馬助殿

至　鎮（御書判）

一松熊大明神　　神主右仝人

但御建立所神事祭禮九月九日　　壹　社

一金昆羅大權現　　神主右仝人

但勢見山金昆羅大權現古社之趣に而御座候神事祭禮十月九日にて御座候　　壹　社

一大山住神　　壹　社

一疱瘡神　　壹　社

一三十万神　　壹　社

一袋振社　　壹　社

右四社共小社にて神事祭禮九月九日にて御座候

一寺　　高松寺

但此寺昔光照寺と申小寺御座候處其後本庄村丈六寺万元和尚彼寺へ隱居被成候節ゟ光照寺を高松寺と書〳〵預り御林枝葉薪として被下來候

一秋葉大權現　　壹　社

但右万元和尚遠州秋葉山を遷勸請有之神事祭禮九月廿八日

一眞言宗　　正福寺

一石橋　　壹ヶ所

寺名取調申上書

（那賀郡稻垣克彌氏所藏）

申上覺

此度

御葬禮御執行被爲遊に付寺院參不參奉申上候樣先月被仰付奉畏當村吉祥寺迄申上仕御座候所

御先靈樣御當座之御節御役所樣御筆記御調被仰付候所文化十一戌年

椿村肝煎

畏遷院様御當座之御節之御帳に椿村金剛寺無住として申上に相成居申所右寺院此度申上に相成居不申候如何相成候儀哉之御旨を以取調奉申上候様被蒙仰候御趣御配被仰付奉畏候金剛寺と申寺は無御座候得共當村動々傍示に金光寺と申貳間四面之阿彌陀堂一宇桁行五間半に梁行三間程之庵御座候を金光寺と村内之者相唱則右庵往古は旦家も御座候様承傳居申候得共何暦頃如何様之儀御座候哉右旦家當村吉祥寺と椿泊浦福藏寺同道明寺三ヶ寺旦家に罷成庵は福藏寺搆に相成同寺兼帶勤之姿に而御座候得共遠方儀故天氣支等之節は福藏寺道明寺旦家分は庵留主守旦用相勤申に付代々取置相調候庵守指置御座候此度御取調之金剛寺は右金剛寺之引合相違無御座様奉存候旨申上候所金光寺之文字鐘類古佛器具又は何等古帳御撿地帳等に相記候引合有之哉之段御尋被仰付奉畏候鐘は小き半鐘御座候得共近來相調候義に而寺号無御座方御撿地等之古筆記も見當り不申候得共中古ゟ日待月待之札守金光寺と相記す板木等御座候右金光寺之外金剛寺に引合候寺庵之舊跡等無御座候に付此度之御取調金剛寺は右金光寺之古名に相違無御座候私不案内に而前申上に相漏候段可申上様無御座恐入迷惑奉仕候此段可然被仰上可被下候尤椿泊浦福藏寺兼帶に被仰上可被下候右之段書付を以申上候　以上

西川益之亟

未十月

當前之通

右等之所に御認今晩ゟ明曉迄に御指出可被成候極々急之御用に候間無御油斷御指出可被成候且福寺へも明日無間違右兼帶勤之引合御申出當住御心得置御仕勤被成候様御懸合置可被成候　以上

（那賀郡湯淺高太郎氏所藏）

神社併合に付申付書

村々森林等に從前有之候祠之類氏神社地へ爲相都候様且村々馬場と相唱道幅廣く空地同斷之場所有之氏神祭禮之節邊通行無之所は田畠開申付候條組切取約め早々差出し可申旨及布告有之所今以何之否も申出無之其中村方に寄小祠之類取約相手懸候哉にも相聞へ如何之事に候何れとも取調の掛り一應申出差圖の上取都候様可有之候此段其方共組村浦不相洩様屹と可申付候也

十二月七日

南民政掛
南荒田野村大庄屋
森猪間助方へ
中山村右同
森愛之助方へ

以上

尚々此狀急々廻達濟組ゟ可指戻候也

右御布告十二月七日夜奉拜上候　以上

山口村組頭庄屋　瀧源五兵衛方へ

木頭村大庄屋　湯淺堅太郎方へ

南荒田野村大庄屋　森猪間助

（外三名略之）

祭資寄進帳

（勝浦郡丈六寺所藏）

今般東京住相蒙移住致候に付其寺御收之御靈祭資として左之通年々差贈候因而懇に祭祀依賴候也

辛未十一月　蜂須賀茂韶

一金拾五兩也

了覺院殿

梅林院殿

正德院殿

右御爲

丈六寺

參考目錄

寺社御建興御祝書　德島市立石成人氏

珠德院邸地を定められし公御書　仝　伊勢藤吉氏

蓬庵

興源寺御制札寫　仝　侯爵蜂須賀家

於日光御法度　仝　仝

神佛混淆廢止に付哀訴寫　名東郡富永久基氏

寺領地下付達書　勝浦郡豊田明貫氏

寺修復仰付狀　仝　仝
靈牌祭事修行狀　仝　仝
寺領に關する達書　仝　仝
苅草申聞書　仝　仝
地藏院記錄　仝　仝
小六殿山伏等に關する古文書　仝　仝
新居見村神社帳　仝　仝
杉尾山禁制寫　仝　仝
杉尾山御制札　仝　仝
袋ふるい林宛行寫　仝　仝
寺名取調申上書　那賀郡　稲垣克彌氏
小仁宇村神社帳　仝　仝
小濱村神主身居取調差上帳　仝　仝
寺院社人出訴に付心得通達書　仝　仝

神事祭禮見合解禁に付御觸書　仝　仝
伊勢參宮拔參に付御觸　仝　仝
遷宮繼行着申付書　仝　仝
神社佛閣參詣者御取究に付御觸　仝　仝
神職祈禱に付御觸書　仝　仝
黑瀧寺正光寺出入濟口覺　仝　仝
御神燈帳　海部郡　佐藤幸雄氏
社寺籍法　仝　仝
大山權現半鐘送覺書　仝　仝
鰐口雪洞大山權現へ送り書狀　仝　仝
渡世山寄付証文　仝　仝
寺法改申達狀　仝　仝
延命寺扶持狀寫　仝　仝
寺領付與狀寫　仝　仝

水谷山免許狀寫　仝
寺領付與狀寫　仝
玄米下付狀　仝
願紙面奥書に付達書　仝
寺領地替地遣覺寫　仝
城之内御林諸神社床並　名西郡
御帳付木相改指上帳　仝
正五九月御祈禱御守札差上申聞　仝
神佛混淆廢止に付　板野郡
別當社僧の儀申出覺　仝
神社調差上催促狀　仝
神社數取調催促に付申繼書控　仝
神社調認め方　仝
神社調方に付申達書狀　仝
神社調申上覺　仝
仝　添書　仝

仝　仝　久米總太郎氏
仝　仝　吉田次郎氏
仝　仝
仝　仝
仝　仝
仝　仝
仝　仝
仝　仝

神社調延引に付申上覺　仝
神社調申上覺　仝
宮床反數木數指出帳　仝
遊行上人御越に付　仝
諸人夫並裁判御請書　仝
他國寺院の轉住伺及下知　仝
寺院出入裁許証文　仝
上浦村寺領覺書　阿波郡
旦那寺御糺に付申上覺　仝
祭禮鏈濟口書　麻植郡
地藏寺寶珠寺出入濟口書　仝
伊勢太夫宿配書　美馬郡
寺領書　仝
社地禁制札　仝
神社鏈御訴訟書　仝

仝　仝　福永龍太郎氏
仝　仝
仝　仝
仝　仝　瀧本眞海氏
仝　仝
仝　仝　近久兼太郎氏
仝　仝　住友新十郎氏
仝　仝　武田浦三郎氏
仝　仝
仝　仝　安宅喜市氏
仝　仝　内田好音氏
仝　仝　内田嘉門氏
仝　仝　古林有尋氏

宗教

切支丹船手當に付御狀

猶以此狀之趣物頭共にも内々にて可被申聞候　以上

（侯爵蜂須賀家所藏御代々樣御書寫中抄出）

廻飛脚指歸候間申遣候然者五七日以前に九州中國四國之各家來之者を松平伊豆守殿へ御呼候て被仰渡候は漸吉利支丹船渡海之時分に候左候へは彼舟之者申樣に〻被仰付樣可有之候其刻は九州衆に可被仰付候若人數入候はゝ中國衆長崎へ近き衆に相加可被申候其上に而も萬一人數入候はゝ備前四國衆なとに可被仰付候間内々可得其意候左樣之節は松平隱岐殿〻面々留主居家老共方へ可申來候條其旨可相守候若隱岐殿〻一左右無之候共過急之時分は長崎奉行中〻國々家老共方へ直に可申來候左候者慥成証文可有之候條可得其意由に候乍去四國衆なと人數入候事は中々有間敷由伊豆殿三浦次郎右衛門に御申候委細長存旨伊豆殿迄御請申上候不及言候へとも下々何角用意等目に不立樣に被仕義第一に候右之趣之被仰渡此已前も有之儀に候へは今更事新敷義にても無之候可被得其意候返て下々むさと事さわぎ申事壯上之聞ため第一不可然候條隱便に物每其覺悟尤候必其心得專一候謹言

卯月十四日　稻田九郎兵衛殿

一右之趣家老共方へ之狀如斯申遣候間可得其意候

一其元下々以下迄も用意等にむさと事さわかしく仕事不及沙汰世上之聞不可然存候條其覺悟第一候若借銀などの取沙汰有之候はゝ其段は其方両人に常々申付置候間何れもに事かゝせ申間敷由申彌九州へ家中之者共罷越に成候者南之土藏に少貯置候銀子をとり出し可相渡候必長崎へ罷越に定候はゝ其分に可仕候也

卯月十四日　　忠　（花押）

家老共方へ之狀可相屆候　　以上

津田新五左衛門とのへ

折下忠左衛門とのへ

蜂須賀山城殿

山田豐前殿

中村美作殿

長谷川越前殿

稻田修理殿

西國出勢に付申付御狀

（候詞蜂須賀家所藏御代々様御書中抄出）

尚以其方かたゝ言上に仕可申越事と存候さたのかきり不及是非候以來物毎能々可相心得候

以上

一筆申遣候然は最前家老共方へ申遣候九州邊へ若家中之人數なと被遣候事も可有之哉との事に候條兼々可得其意由申遣候其方にも爰元に而申聞候へとゝ我等家中之者なと九州邊へ罷越候事は中々有間敷旨に候條穩便に仕可然旨申聞せ候然處頃傳聞候に在々迄も事さわき武具以下用意仕候由に候さたの限不及是非候其方其元へ罷越右之趣承候は家老共方へ心付可申事と存候無左候哉又我等方へも不申越候勿論其方ゝ此度爰元へ申越候樣に聞候へ共件之趣を急度言上には何とて不申越候哉中々さたの限絶言語候其方なと若武具以下之ばゝ等置なをし申度事候は如何にも穩便に連々を以可申付候右之被仰渡之趣は當年初而之事にあらす此以前も被仰渡候左候は後年迄も可爲其分候可得其意候也

此狀共可相屆候　　以上

六月三日

（御判）

西尾左京とのへ

（侯爵蜂須賀家所藏
阿國法式之冊中抄錄）

切支丹宗門御改に申付書

吉利支丹宗門彌御制禁之旨今度從公儀御書付を以被仰渡候右御法度之趣例年堅雖申付置候此御書出之旨無油斷奉守候樣に侍中へ申聞猶以常々可相改者也

寛文元年丑七月十二日　　渭津宗門改奉行共へ但名書有

從公儀出候御紙面之寫添遣之

吉利支丹宗門彌御制禁之旨今度從公儀御書付を以被仰渡候右御法度之趣例年堅雖申付置候此御書出之旨無油斷奉守候樣に町人共に申聞壹町之內五人組相定猶以常々可相改者也

寛文元年丑七月十二日　　町奉行ゟ名書有

淡州町奉行ゟも右同

從公儀出候御紙面之寫添遣之

吉利支丹宗門彌御制禁之旨今度從公儀御書付を以被仰渡候右御法度之趣例年堅雖申付置候此御書出之旨無油斷奉守候樣在々百姓並浦々番所之者にも可申聞百姓共之儀は壹ヶ村之內に五人組相定猶以常々可相改者也

寛文元年丑七月十二日　　郡奉行三人ゟ

從公儀出候御紙面之寫相添

今度從公儀被仰出上札之趣堅可相守之若違背之輩於有之者其科可任御制法之間訴人に罷出者在之は褒美可遣之者也

萬治元閏十二月十六日　　淡州ゟも同但如例

右之通從公儀出候御制札に添両國辻々に建之

（那賀郡三木春語氏所藏）

切支丹宗門改帳

那賀郡南荒田野村濱庄助從弟牢人　　三木平、兵衛

仕上る書物之事

切支丹宗門御改に付度々之御法度書猶以此度被爲仰出之趣致拜上奉得其意候事

一私貳親兄弟妻子共眞言宗に而則旦那寺南荒田野村神宮寺相頼申處實正に御座候並召仕申下々男女共不審成宗門無御座候先年誓紙を以申上る通今以相違無御座候自今已後彼宗門之者聞出し候

はゝ早速御郡御奉行處迄御注進可申上候爲後日如件

濱庄助從弟牢人　三木平兵衛（花押）

享保拾壹午年二月

稲田喜三兵衛殿
津田勘治殿

右三木平兵衛壹家貳親兄弟妻子召仕申家賴男女共眞言宗則拙僧旦那に而御座候所毛頭相違無御座候附り南荒田野村神宮寺那賀郡留岡村正福寺末寺に而御座候拙僧儀出生德島上原郡左衛門世伴歳拾五ゟ大龍寺弟子に罷成其後中大野村神宮寺へ入院仕罷在候處桑野村梅谷寺肝煎を以享保三年二月南荒田野村神宮寺請取住居仕罷在候寺内僧俗共不審成宗門無御座候諸旦那不限宗門不審成者御座候はゝ早速御郡御奉行所迄御注進可申上候右之通少しも相違無御座候爲後日書物如件

享保拾壹午の年二月

南荒田野村
神宮寺

津田勘治殿
稲田喜三兵衛殿

宗門替誓文之事

（那賀郡土橋瀧藏氏所藏）

私儀元來切支丹宗門に有之所此度御法度被仰出之趣致拜上奉得其意候事

一貳親兄弟妻子共眞言宗に宗替可仕候事

右之通誓紙仕處相違無御座候依而爲後日書物如件

正德六年五月

土橋六右衛門㊞

吉利支丹宗門御改申聞覺寫

（三好郡古郷吉右衛門氏所藏諸控書中抄出）

今度於江戸被仰渡吉利支丹宗門御改に付申聞覺

一侍中之儀此以前ゟ申聞通他國ゟ何者によらす面々方へ參着之者早々其手崎之奉行所可相斷當分之使者飛脚等は可爲各別尤不審成者於聞出は是又定置賀島主水蜂須賀式部山田豐前方へ可申達事

一市中之儀は此以來ゟ申付通其町の年寄五人與常々無油斷相改不審成者有之は奉行所へ可申屆候脇々於相顯は曲事に可申候自他國來者宿仕儀是又年寄五人與へ相斷吟味之上にて指置可申事

一在々之儀此以前ゟ申付通其村之庄屋五人與常々無油斷相改不審成もの有之おゐては郡奉行へ可申屆候腋々ゟ於相顯は庄屋五人與出事可申付他國者は不及云他郷ゟ參者於有之は庄屋五人與へ相斷吟味之上宿可仕事

一江戸京大阪ゟ両國へ來者之儀は其所之留主居方ゟ奉行所へ手形添可越旨申付候條可隨其證文事

一乞食之儀は有來通町奉行郡奉行切に入念改可申事

附宗門訴人輩は從公儀被仰出御褒美可被下候次に自分定置金銀可遣候侍之儀は別而可爲忠節事

辰十二月廿三日

（麻植郡藍井各立氏所藏）

宗門誓詞條目

誓詞條目

一私共二親兄弟妻子共淨土眞宗に而御座候切支丹宗門に而は無御座候事

一私共縁者親類知音浪人商人其外不寄何者に宗門相改不審成宗門之者は一夜之宿も仕間敷候事

一自今已後切支丹宗門並に宗門不審成者候はゝ假令親子兄弟不寄何者に早速御注進可申上候事

右條目於違犯者忽洩如來之本願別而者蒙祖師之冥罰永可墮地獄者也仍而誓詞如件

文化二年丑八月五日

喜來村德住寺門徒同村郷鉄炮　森　爲助
同　榮次郎
同　益右衛門
同　辰五郎
同　兵次兵衛
鴨島村常敎寺門徒御付　菊助
同　内原村　新助
山路村善正寺門徒同村　岩之助
同　長藏
麻植郡村西圓寺門徒同村　林兵衛
學村善樹寺門徒三ッ島村　熊三郎

（那賀郡湯淺高太郎氏所藏）

洪水死亡者供養に付御觸

左之通組村浦不洩樣可觸知者也

十月二日

民政所

去る九月七日十八日両度之洪水に付南北村浦死亡之者有之不便之事共に付爲供養當月十七日寺町於般若院大施餓鬼執行被仰付候條此旨奉畏村浦死亡人衆族之者共を始近親之者共へも右御趣意懇に申聞右日限前日迄に死亡人戒名組々取都右院へ可指出候尤參詣之儀人々心得次第に申付候事

右御書十月三日奉拜上候　　己上

那賀郡中

大庄屋與頭庄屋共方へ

櫛淵村大庄屋

細川夏輔

外八人

參考目錄

雨乞蛙祈禱の記錄　德島市　馬詰梶五郎氏

町人宗判申上書　仝　多田仙次郎氏

寺請狀　仝　仝

宗門誓紙呼出狀　仝　山内時行氏

牛王判形停止書　仝　伊勢藤吉氏

切支丹宗門御改帳　名東郡　後藤捷一氏

名東郡中宗門御改目錄控　仝　仝

南齋田切支丹宗門改帳　仝　谷類次氏

文政八年切支丹宗門帳　仝　榎本儀市郎氏

切支丹宗門に付仕上書物　勝浦郡　美馬一榮氏

切支丹宗門御改帳　仝　寺澤德三郎氏

切支丹宗門改帳　那賀郡　勘田島太郎氏

宗門調書　仝　湯淺佐太郎氏

切支丹宗門改帳　仝　宮崎寛太郎氏

宗門御改一卷　仝　湯淺高太郎氏

切支丹宗門御改帳　仝　仝

切支丹宗門御改に付申出書　仝　仝

宗門御改名面差上帳　仝　仝

切支丹宗門御改帳　仝
洪水死亡者供養に付御觸　仝
仝　一周忌供養に付御觸　仝
切支丹宗門御改書物帳　板野郡　吉田次郎氏
宗門請相証文　仝
仝　起請文知書の事　仝
仝　御改に付書付　仝
宗門改に付申付　仝
宗門請相証文　仝
宗門帳　仝
宗門改に付仕上牢人書物帳　仝
宗門帳　仝
切支丹宗御改帳　麻植郡　渡邊菊太郎氏
切支丹宗門就御改仕上書物帳　三好郡　武井榮三郎氏
切支丹宗門御法度御觸寫　仝　古林有尊氏

學術

學制意見書寫

（德島市横山文吉氏所藏）

一國子總教　一人

右者御當職庶政御掌被成候如〳〵學政一切總掌候至而重き任に候得者御家老へ被仰付度候

一總監　書記　一人

右者學館惣奉行に御座候中老へ專職に被仰付度候總監毎月六齋程必學館へ出席有之學中之得失諸御役人諸學生平生勤惰並に姓名格祿等迄委曲に知候而惣裁教授等か申出候事を承學中一切之事に與り是又重き任に御座候諸役人都て惣監に屬申候

一總裁　一人

右者學中學問に與り候事書籍什器等之瑣細の事に至迄學問に繫り候事は一切裁斷致候而諸御役人並に諸學生へ指揮致候祭酒など申候も祭之時酒を供候事を司り候故に名け申候此任は御儒者之中に而重き事に御座候老年之人一人被仰付度候

一教授　無定員

右者惣裁と同く學務に與り學館へ輪次交直致候而講書會講等相勤諸學生へ教授致候事を專ら

掌候職に御座候御儒者へ被仰付度候

一訓導　二人

右者專ら子弟を訓導致候職に御座候諸士中に而生質學問好候言行篤實成老分へ被仰付度候

一助教　五人

右者教授訓導に次き子弟を誘掖致候句讀質問の事にも與り候役に御座候中小姓以下學問好候人へ被仰付度候

一句讀師　五人

右者無格分に而素讀を教且又素讀上り候者之質問を承候役に御座候此役は人數多く無御座候而は勤り不申候助教句讀師入交り勤候得者合て十人餘有之候はゝ可宜存候

一助句讀　無定員

右者十四五歳ゟ十七八歳に至候素讀上り之者句讀師を助け素讀の下教等を致候役に御座候追々上達致候得者句讀師へ進申候

一筆吏　六人

右者六人之内三人は少々學問も有之手跡達者に御座候者惣裁教授等へ屬候而毎日一人つゝ出

候而學中之事務記錄致候三人は毎日一人つゝ出候而玄關へ相詰候而學館出入致候者之名面等記錄致候講會名面書上は六人兼而記候得者平日は毎日両人出勤致候得は宜御座候

一小童　三人

右者御儒者講釋之時書物持行候而見臺に置且又毎日出候而茶を取候小共に御座候

一司監　三人

右者學中監察之事を司り講席聽衆並に平日諸學生法外之事を正し候職に御座候是は御目附に屬し小目附同樣に被仰付度候

一司席　二人

右者御定日聽衆座席進退之事を司り候役に御座候司監兼帶致候而も可宜存候

一司籍　三人

右者學館御藏書を司り新に御買上け或は平日手入致破損等に心を附毎日拜借に出候諸學生へ御書物借し候而御土藏へ出入致候役に御座候御書物持運び候者茶取上り小童両三人司籍へ屬候而可然存候

一司計　三人

右者學舘中筆紙墨等諸費用之勘定を司り候役に御座候學問無御座候而も算筭達者に致候得者
宜御座候

一清　人　一人

右者學舘内外掃除之事を掌候掃除奉行に御座候掃除の日限月に幾日と申定日有之候而間斷無
之樣被仰付度候

一幼　儀　師　二人

右者諸禮を教候役に御座候御家中に而小笠原諸禮習熟致候人御擇被仰付童子輩之師範に被仰
付度候稽古致候場所は講堂中廣く候而宜御座候童子幼儀を習候事に御座候得者小笠原百ヶ條
に而深き事には及申間敷候

一習　書　師　二人

右者習書所へ毎日相詰候而御家中童子輩手習に參候者へ書を教候師匠に御座候御家流俗樣を
能く書き候人被仰付度候楷書唐樣なとも兼教候事可宜存候

一司　舍

右者御長屋御造作被仰付候上諸學生御書物拜借獨看致候者區分之學舍へ入候を司り候役に御

座候是は司籍兼帶致候而も相濟申候

一司　寫　二人

右者學中一切書付或は寫し物等を司り御寫字の役に御座候大抵唐樣楷書を達者に書き候人御
擇被仰付度候

一司　漏

右者學舘中時計を司候役に御座候半鐘なと打候も此役へ兼而被仰付度候

一門　吏　二人

右者學舘門戸毎日開閉を司り且平生御門番仕候役に御座候司監司門を兼申候而門吏は司門に
屬候而可然存候御門側に住居致候はゝ二人に而も勤り可申候

一小　使

右者諸役人使候得者數少く候而は不自由に可有御座候是又平生度々替り不申候樣被仰付候

一厠　役

右者學中用候水を汲諸雜用に使候人足に御座候

右諸御役人名目並に勤方員數等存寄匆々相認申候同音の職掌なとも有之候猶再熟念を入相考改可

申候先大略如此に御座候右之通大抵諸御役人被仰付候はゝ助教句讀師なと諸學生へ教授致候義は句讀を授候は一統に同樣に致候而疑義を承候は四書五經之中科を分ち課程を立て誰某は論語孟子誰某は詩經書經なとゝ人に應し得候所の書を別ち擇候はゝ人々專門に相成其の書に精熟致し教候人も習候學生も安成事無御座候左樣無御座候而は四書五經不殘疑義を解し候は至而難き事に御座候其人を擇候而も全備致候人は甚乏く御座候其餘歷史諸子百家詩文章之學は互に講習致先輩へ尋申候而不解學候得者年を經進申候何分浮華之風を去四書五經等の書を本に致教申度候

一學館中規則賞罰等の義も追々存寄相考申候而認指出可申候　　巳上

丙辰十月廿二日　　那波與藏謹錄

劍槍稽古存志申上覺書寫

（德島市長尾覺氏所藏）

覺

先達而劍槍稽古爲勵方之儀に付見込も御座候得は無服藏申出候樣御達に付爲差見込も無御座候得共聊存志申上候儀に御座候然處此度關東御鎭撫方被爲蒙
朝命近々
御東下被遊候に付御供被召連候面々此度之儀は砲隊迄に而多分一僕をも召連不申懸士分に槍壹本も用意仕不申樣承申候此度
御東下之上御鎭撫とは乍申趣に寄兵端御開不被遊候而は相濟不申儀も可有御座と奉恐察候根元兵を仕ひ兵器を用るも地理に依而差別可有御座と奉存候且人々得手不得手も御座候へは地理に寄人に依而兵器之相違無御座候而は實用をなし申間敷然に此度之戰には砲戰而已又此度は刀槍而已と
御限り被遊候樣に而は譬朝命たりとも必死之血戰は調不申乍恐何時迄も御斷被仰上候而も御違勅御不都合とは不奉存候人々其得たる所之兵器を以こそ快く血戰可仕儀と奉存候然に槍壹本をも不爲持候而は其場に至後悔仕勇氣も相緩み可申と奉存候右樣之振合に而は已來槍之儀は御軍用之兵器とも不奉存左候時は今日稽古方如何程心を碎き世話仕候とも無用之槍術相勵候者有御座間敷と奉存候尤砲戰專之時世には候得共土地之廣狹曲直單兵必死之戰爭に至候而は砲銃も間に合不申槍刀に利方御座候儀も可有御座と奉存候左候へは已來槍之儀は御廢し被遊候御儀とは不奉存候得共指當此度御供に槍壹本をも爲持候者無御座候而は最早御廢し被遊候同樣に心得違可申と奉存取立方に心配仕罷在候間右等之人心に押移不申樣御家中一統に態々御示し被仰付度奉存候兼而先達而御達も御座候に付無指扣此段申上候間幾重にも奉歎願候　　以上

五月廿六日

同志之面々建白寫

原　軍左衛門
山岡上之助

今般關東御鎮撫被爲蒙
仰近々　御進發被遊候御趣武門之御光榮不過之奉存候得共誠に以不容易御事件孰も奉苦慮儀に御座候然所從
朝廷御沙汰も不爲在候哉之御儀に而此度之　御進發と砲隊而已御召連に相成槍之儀は凡而御持せに不相成御趣奉敬承候素より深き　御趣意も可被爲在御事には候得共微臣等淺劣之至を以愚考仕候得は疑惑之至に而屹と御國情にも相係り可申哉と奉恐入儀に御座候抑槍之儀は
皇國之長技武夫之要器に御座候上　御本藩におゐては御開國之御砌も專槍を以御勳功御顯し被遊其後益槍法之研究格別之御儀に而實に他國之不及事は衆の兼而知る所に御座候就而は上にも一通りならす厚被思召候哉每時勉勵之儀被仰付殊に近くは先日も劔槍之儀何時迄も御捨難被遊　思召に付重々御世話被遊候御事故勉勵爲仕候旨師家之者迄被仰付孰も難有御請仕早々夫々門中ゟ布告仕最早御家中一統承知不仕者は更に無之相至候所此度實地之御進發一大事之御場には御用ひ不被遊御樣子は乍恐　御言行御一致とも難奉窺奉存候且別段槍術御廢止之被仰出は無之候得共被仰出候にも相勝り御廢止指見申候事に候得は誠に先日勉勵之儀被仰出候以來未た幾旬も相立不申內御命令反覆仕候樣人々奉存候而自然物議相生候儀不少と奉存候是誠に人心を動し兼々御心配も被遊候一致一和に相障り候而已ならす重々恐多御事なから信を御家中一統へ御失ひ可被遊御事と奉存候賢君は信を一夫にたも失はすと承及候聖語に信なくは不立と申儀治亂共に服膺可仕儀に候上亂世には猶々御大事之御儀に而南門之木を北門ゟ從させ候而金を遣し信を示し候例も承及候且上行ひ下效ふは影響よりも捷しと申候得は右之御次第忽萬事に押移り確乎たる御政令も下に疑惑を抱き候樣相成可申哉乍恐御初世之御事に候得は猶更信義を御失ひ不被遊御事肝要と奉存候就而は此度槍御廢止之儀從
朝廷御沙汰も候はゝ唯今お御斷之御儀被仰上可然御事と奉存候京都におゐては
朝旨之重きを以速に御遵奉被遊御歸國被遊候而は　御國情之御大事を以御斷被　仰上候御事御進退御恭順之至に被爲在候樣奉存候此度暫時御歸國御願被遊候とも偏に御國情難被爲默止御趣意を以被仰上候御事聊御不都合之御儀には不被爲在樣奉存候何卒幾重にも尊慮被爲回度奉懇願候尙又愚意之件々左方に列白仕奉指上候實に御出陣之御際に相臨彼是奉申上候段奉恐入候得共國家之御

爲不爲士氣之振不振今日に御座候と奉存候に付同志之者共多罪之程不相顧奉申上候

一近來西洋始萬國砲銃大に相開け砲戰を專用と致候得共異國におゐても砲而已に而も無御座既に銃槍と申者も有之腰には劔を帶し候得は場により單兵之接戰も可仕儀と奉存候乍併皇國之如き兵器之利は萬國に超越仕候儀と奉存候取分夜討之節或は險阻之地藪叢林藪に依伏兵を用候抔には最初より手詰之血戰決心に而不意迅速突出之場合も可有御座左樣之節度を過候而は利器之砲銃も却而鈍器と相成可申銃槍は何程之事か可有御座單兵槍術に大に利用可有御座奉存候右に付平日修行も勉勵仕候然に此度之御供之内には砲術は未熟に而槍術は格別心懸罷在候者之得手を捨不得手を主張　被仰付候而は御命令を奉違背には無御座候得共忽不服を相唱可申不服を相唱候は不和之基に而三軍之災是より大なるは有御座間布奉存候兵法にも令民與上同意可與之死可與之生而不畏危と申候得は平日は許より御軍事におゐては尙更上下一致一和第一之御儀と奉存候尤是迄御人數之内未實地に涉り候者一人も無御座只座上之論議に候得は何時迄も實地を踏之利害得失研究迄は古來之兵器御廢絶は難被遊御儀と奉存候右彼是之懸り御賢察被遊槍士百人計御召連被　仰付度奉仰願候

一御鎭撫被蒙

仰候御上は圖外之權は御委任可被遊所兵器兵隊之儀迄

御命令下り候儀は御至當とも不奉存候昔保元に爲朝之軍議を宇治左大臣採用無之建武に正成之軍議を坊門宰相壅蔽いたし候儀も御座候此二ヶ條は武門に御委任不被爲在候御失体より敗れに相至申候舊適例御座候此度も兵器隊陣等之法は偏に御委任可被遊御儀と奉存候に付御弁解被遊候上御委任御願被遊槍之儀は　御國情被仰立御用ひ被遊候樣御懇願被遊度

朝命に候得は可否を御撰不被遊御遵奉被遊候樣に而は御成功之程乍恐無覺束奉上存候仮令他藩には廢止に相成候共御本藩におゐては御廢止被遊間敷奉存候此儘御捨置に而　御發途被遊候而は屹と御國情にも相係り人心不和之基と相成可申奉存候

六月二日

原軍左衛門　原市九郎
松原惣左衛門　渡部市左衛門
樋口熊之亟　村田熊之進
岡島小五郎　大岡權平
戸田芳藏　宇田東作
團徳五郎　多田銀右衛門

山岡上之助　牧野清兵衛
佐山市郎兵衛　篠山伊左衛門
竹内虎之進　澁谷力太郎
福家兵太兵衛　速水延之亟
岩田亨介　小倉富三郎
小倉樟之助　竹内六藏
竹内順太郎　今田剛介
盧田丈吉　加藤榮之亟
糟谷助之亟　坂本虎之助
大島伸六　倉知益左衛門
渡邊七右衛門　長野彦太郎
服部雄助　服部忠左衛門
牧通之助　林關之亟
西尾保之進　祖川勝太郎
澁谷章治　加藤清吉
牛尾彌藤太　長尾貞之助
大屋安左衛門　高井雄作

六月二日朝建白書取連名に而指上候所同日夕岡島原小倉山岡呼懸に而御目付井上兵馬殿朝川信藏殿口達左之通

一今朝各連名を以御指出之建白書取之儀に付而は則昨朔日此度御供之士銃隊肝煎之面々迄達置候儀は御承知無之哉之旨尋に付如何にも相心得不申趣相答候得は嘸左様に而社と存候此度御供之内槍術始終相心懸居申此度槍をも相用申度と存候者は願出候得は櫓之方に手槍指出候得は御送込に相成相用候時期之儀は其時々上方御指揮被遊候間願度面々は早々申出候様相達置候得共未た壹人も願出候者無之右様に被仰付置候得共此上にも已來之稽古方にも相障り取立方も相調申間敷趣且は御成功之程も無覺束と奉存候趣此貳ヶ條篤と申談申出候様被達候に付同志多人數之事にも候得はいつれ明日申談候上可申出旨相答退

城翌三日山岡座本晝頃方申談翌四日朝師家之面々尺登城之上朝川倍藏殿別席に而懸合左之通

一二昨夕御尋之義昨日篤と申談候所此度御供之士銃隊肝煎迄御達に而槍相用申度面々は願出候樣
左候へは御槍ゟ御送込之儀肝煎ゟ申繼に相成候趣然所申繼候中ゟ申繼違に相成候樣哉此度御供
之内槍術熟練之面々を願出候樣にと承知仕候面々も御座候而左樣被仰付候而は自分より熟練と
は中々得不申上乍殘念指扣罷在候者も御座候樣子に付右樣之懸に而は壹人も願出候者無御座候
儀と奉存候中には此度槍之儀に付彼是歎願も御座候に付右等之口御塞きに被仰出候譯柄に而根
元槍は御廢止被遊候思召抔と申唱居申懸兎角御言行御一致とは不奉存候間已未稽古方勉勵仕候
障りに相成可申と奉存候左候へは稽古人無御座候間取立方は相調不申譯に御座候並右樣人心を
御失ひ被遊候而は一致一和之場には相至不申一致一和に相成不申時は幾萬人御召連被遊候とも
御成功は無覺束と乍恐御心配申上候儀に御座候此度は初而御出馬之御事に而候得は御一大事と
奉存候間指扣なく申上候旨申述候所夫々致承知候尚早々申上もいたし候上相達候間相扣罷在候
樣申聞相扣居申内晝頃に至今暫時際取候間一應相仕舞夕方登
城候樣達に付一統相仕舞尚又夕八ッ時過登城致候所御年寄ゟ達に而追付
御目見被仰付候に付左樣相心得居候樣被申聞無程御小書院に而
御目見被仰付

御意左之通

此度東下之節槍士隊召連之儀に付此日書取を以申出候次第篤と熟覽も致尚又今日朝川倍藏ゟ申出
候懸りも委細令承知候然所承知之懸り此度之儀は全砲銃而已之備に而如何にも右樣偏重に相成候
儀は不宜其上場に寄候而は槍隊に無之候而は不相叶儀も有之候に付彌槍士隊召連候所に決心致候
吳々も前段申出候懸りは至極尤之儀に而彼是大慶致す
此度槍士隊も召連候懸りに付已來槍術取立方之儀も出精せしめ候樣

六月四日

槍士隊名面

伍長 岡島小五郎　郷司勝藏
牧卯之助　多田左五郎
赤川八郎左衛門　長江虎次郎
坪井永太郎　岩田亨介
小倉樟之助　安達幾太郎
加藤甫三郎　猪子立右衛門

位田平次郎　伍長原軍左衛門
原市九郎　市原應介
増田覺之助　猪子助吉
速水清太郎　松原惣左衛門
中川貞五郎　渡邊市藏
齋藤康吉　清久敏吉
山川傳次　山内忠兵衛
澁谷章次　二宮恒太郎
伍長山岡上之助　古和達之介
高井雄作　三木増次郎
高田藤九郎　田中民之助
河野作五　久次米猪太郎
青山新兵衛　小畠勝三郎
長野彦太郎　服部忠左衛門

勸學篇

（板野郡多田幸太郎氏所藏）

湯淺箭之亟　伏屋滿二郎
田中朝之助　以上

配下之御役人へ文道之修行相勸候趣意書

此度各へ聖道之學問相勸候段は全我好候所へ引付候樣之義に而は無之愚生熟相考候趣意有之候に付其件々左に申演候

一抑此海部郡は德府を去る事遠くしかも山坂嶮難之地にして往來心に任せす上下之情塞り易く候に付先年か夫に應し候御規定も有之候得共年を經るに隨流弊に及中古諸役人を始村浦之役人共中途之子細も多有之善惡可否渾沌として諸人數致困苦候塲合寛政之末暦御郡代として御撰之面々被指遣萬事之御取治方御任せ被仰付諸事取改候に付而は御政令復舊いたし其以來勸善懲惡理非決斷明白に候處か採薪捕魚耕作商買之稼業もいたし易相成年來閉塞之情を忘一枚安堵之思をなし候樣相成士農工商之風俗も追年相開候義と存候扨又此郡之地理におゐては前は南海茫々として蕃賊之禍朝暮に難計後は土州之境にして隣寇之思なきにしもあらす故に古か其備も被仰付

有之就中寛政之初年ゟ追々御備も御嚴重に被仰付尙近年に到候而は益御手厚被仰付候に付而は
格付之面々を始配下一統武藝方之心懸も先々役以來之勸勵に隨ひ年々歳々厚相成殊に近來は射
術火巧抔古ゟ郡中に學候者なき業方まても相始り當時武備之盛なるありさま當郡におゐて古來
如此事有之間敷樣相運候次第實に珍重之至面々之大慶不過之候
一前顯之通第一風俗相開次に蕃賊隣寇を防候武備も大に相開候得共文事におゐては未一圓相ひら
け不申候今御國之風俗を見候處德府に近き郡々は出府して致學問または可然師匠を招請して致
修行文事に長し候者多有之美馬三好之遠鄕といへとも其學之開たる事當郡に比候得は大に勝り
候抑當郡は愚生か輩出張して萬事取治候事故文武両道之勸勵も行屆四民ともに風俗赫々として
他郡に秀可申筈之處海寇御手當第一之武備すら近頃漸相開候懸文事未開かすして人物風俗他郡
に相劣候段扨々歎かはしき至り候熟當郡之人情を察候處人として聖賢之道を學不申而は難計譯
を眞實心得候者無之學問は先不致而も相濟候物之樣存居候義と相見實に愚成事に候今川了俊子
息仲秋制示之條々にも不知文道而武道終勝利とは則第一之個條に記したるは誰も知たる事に候
得とも夫を心に留候而文道を學はんと欲せさるは志なき故に候其志なきも人々之不心得にも無
之其道を敎候者なき故に候且又愚生幼年之砌

東照神君御自筆之百ヶ條之寫を窮に拜寫いたし候其中に左之御條目有之候
一源平藤橘及菅江両家在原滑原等は皆上帝より下賜之姓也此内武將たる人を見に其器備れとも才
學拙き人は聖賢之道に暗く謀皆私意より出候事武之武たる事を不知不能無耻辱往々に設成學寮
自勵し他を勵して共に可入其德事
一治國平天下之方は本聖門より出此道に不入して士人たらんと欲せは猶緣木求魚投水覓火かこと
くならん淺間敷愚成事之酷敷事を省事
右之御個條は將軍公鄕之上に懸り候御條目と相見候得共推及候時は庶人之身之上とても同斷に
候其譯粗左に相認候
武將たる人を見るに其器備れとも才學拙き人はとあるを萬民に及し士農工商を見るに學問せさ
る人は聖賢之道を不知其已を處し人を處する事皆私意に慕て禮義廉耻を思はす各其職分を怠り
士たる事不能農は農たらす工商もまた同し醫師陰陽師之類もみな是に準す神職僧徒の道を同く
せさる人といへともまた然らさる事能はす
總而官職にあつかる者は猶更之事也人之司たる人は勿論其下に立役人に至迄才學拙き者は一已
之任にも勝かたしましてや人に施すにおゐてをや

治國平天下之方は本聖門ゟ出士此道に不入して人たらんと欲せはとゝゐるを萬民に及はして申せは意を誠にし心を正ふし身を脩め家を齊ふるのこと國を治め天下を平にすると其理一貫せりみな知を致し物に格るより出入此道に不入して人たらんと欲せは木に登りて魚を取らむとし水に入て火をさかすか如し故に聖賢之道を學されは身分正しくならす身分正しからされは一家治まらす

一聖賢之道とて別にかはりたる道は無之候只人之道か聖賢之道に候夫故學問せすしても道に叶ふ者はたゝ聖なり故に生れなからにして知る者は上なり學人て知る者は次なり困みて學ふはまたその次なり困みて學ふひさる民是を下とすと聖人も被申候如くに而不學しては道の道たる譯難相分善惡可否を不辨私意につのりて只己か是となす事を是といたし己か非となす事を非といたし候然時は何を申も聲の高き者か勝候樣相成道によつて是非を正す事は無之候人と生れて人の道を明らめさる時は鳥獸にも劣候凡人間之道つゝまる處は忠孝か第一に候得とも夫も學問いたさす候而はいかなるか忠義やらいかなるか孝行やら實に合点は難致候

一學問と申せは多く書物を讀み博く事を知り詩文章抔をも能するを學者大家抔と申樣心得候而は大に致相違候學問は何之爲に致し候そや心を正ふし道を守り天命に叶子孫をも繁榮せしめむか爲なり何程博覽多能なりとて道を守らさる者は誠之學者に而は無之候惣而學問にも其人々之身分にしたかひ其仕方差別有之候得とも其忠孝を本し己を脩め人を治むるの道は一なり

一其道を守らむとするに敎を受て學ひ不申時は私意に暗みて道を損ひ身を傷り候故に人一日も師なくんはあるへからす扨其敎は聖賢之道に而候それも前に申如く聖賢之道とて別に道を立たるには無之人間自然之道を說て人に敎へられしを其敎を受し人々尊く難有思ひ後世之人の爲に書記したるが四書五經を始め多くの書物と相成敎傳はり候事に候故によき師匠にたよりて其書物を讀み其敎を受て身分に引當相學候はゝ私意相生不申して道を守り候事も調候樣に相到可申候

一右之通に候事故凡之人みな學問いたさすしては難相成さて學問いたし候にも先目當を立ていたし候か第一に候目當あしく候時は却而學問が害に相成空文にはせ風流に傾き偏固に陷り神佛を毀り名利を貪り慢心に長し候のたくひ古今ともに其弊少からす殊に日本は義國にして治國平天下の事武道を先とし人性之剛强なること萬國に卓越たるを以て海中の一島なりといへとも古ゟ中華夷狄ともに侵すことあたはす故に士たる者此理勢をよく心得て學問せさる時は口には聖道之治國平天下を唱ふといへとも心に其道をきはめしるの塲にいたることを得す剩へ天性之剛强を失て柔弱に相成折角學問いたし候とも益なきのみならす害をなし候夫故目當か甚た大事に候

一前に記有之候文道を不知して武道終に勝利を不得と申も只一通りに考候時は武夫之心得とのみ存可申乍去全く左様に而も無之候尤右之一條第一は武藝何程相派立候而も文道夫につれ不申而は武道開けて盛に行はれ候とは難申段を可申演ため相認候義に候得とも右一條四民に及ぼし候譯有之候に付夫をも爲可申演相認候事に候も文道と申も矢張聖賢之道に候夫故聖賢之道を不知しては武道も畢竟之勝利無之と申事に而正面は人の上のみに立候士の身之上にかゝり候示して候得とも夫を庶民に推廣めて申候時は聖賢之道を學されは武藝畢竟不可得極意事

聖賢之道を守らされは農民畢竟可失家督事

聖賢之道を守らされは職人畢竟不被用事　聖賢之道を守らされは商人畢竟不可得利潤事

聖賢之道を守らされは醫師畢竟難救人事

大概右之通に候得は其外は何人に懸候而も同斷之譯に候是を以て聖賢之道に洩るゝ者なきを知て其道之尊きこと可被知候

一前件々申演候旨趣は素より不才簡見之異說に候得は僻言も可有之候得共中らすといへとも遠からすと存候穴賢

各一統愚生か示候處に感服して今より文道に志を厚くし切磋琢磨不怠して其風義道德追々相廣まり村浦之長たる者を始其下農工商まても推及候樣相到候はゝ幸甚何事か是に過らん愚生此郡に宰となりてよりこのかた既に數年文事未開すして四民之風俗全からす譬は夜の明さる世界之如くにして明德之明らかなる人なきを歎息して一日も忘れす然共海寇御手當第一之御場所に候得は先武を先にして文を後にせん人はあらす是迄武事にのみ勞念いたし候折柄幸に賢主之尊慮を以御手當向之術策規定も嚴密に相成武藝におゐても欠たる事なく夫々元建出來いたし候に付此上文道相開候はゝ是迄世話いたし候武道も終に勝利を得へきの場に到り四民之風俗全く化せむことをいとたのしく存候斯存立候得共素より愚生人を敎化いたし候學力も無之且は勸向忙劇之事にも候得は師匠と相成敎導いたし候人も可有之哉と德府之學生に語らひ候處御鐵炮之者西條寅之助儀いまた壯年にして熟成之學者には無之候得共到而篤實謹厚之人に候故村學師たらんには可然人と存申入候處不才を耻候而承引不致强て相勸漸歸服いたし居候處追々志相決先大綱十ヶ年と相立其間一ヶ月は當地參一ヶ月は罷歸候樣いたし年々半季計宛往來して敎示いたし可申十ヶ年相立候得は當地におゐて人之師と相成者も出來可致左候得は其上は其時之趣に應し可申と盟約既に出來いたし居候に付而は最早何時も申遣次第可參候仍而今より志を起し彼師に付て人之人たる道を明かにせんと存候面々は取立人又は世話人迄名面可被申出學問之仕

樣規定之筋は別紙に相記有之候尤餘り多人數に相成候而は一人に而敎示も難行屆に付志厚き面々のみにいたし度候故志無之面々とても夫を咎候心底はいさゝか無之却而名聞を思ひ眞實學問之心懸なきに名を出し置追々相學不申者等有之候而は他之勵を相折き候樣相成甚不宜事に候條夫等之輩入門之一列に加へ候義嚴しく致禁制候事

干時弘化三年丙午正月

聚葬　高木宗矩

學規

一此度聖學相勸候義は先諸御役人迄之義に候得共追々下民にも及し度存志に候得は農工商之類たりとも致傳承其志有之相望候者は一列に加へ可申事

一幼稚之者は素讀のみいたし候事

一弱冠壯年之者は素讀講釋兩樣たるへし尤地盤素讀足り居候者は講釋承候迄に而も人々心に任せ候事

一强年老年に至り候而は假令素讀足り居不申とても講釋承候迄に而可然夫も人々之心得次第に而讀書いたし候はゝ尙更可然事

一敎示之義は日和佐大里兩所にていたし候事

一日佐佐に而師匠逗留之義は可然家を借請手世帶致候筈之事

一日和佐詰御役人之面々並其子弟とも講釋承候義小子出張中は御郡代家に而會合いたし可申事

一右面々素讀之義は師匠之旅宿へ參可申事

一日和佐に而御役人之外學問相望候者有之候得は素讀講釋とも師匠旅宿または廻り坐本抔にいたし可申事

但追々心懸之趣に寄御郡代家へ參御役人之末坐に相列候義可相免事

一日和佐に而此度入門いたし候面々師匠罷越居不申節修行相怠候而は上達難致候に付其間取立人之義御陣家御長屋詰之面々は福井兵右衛門受持其餘之者共は廣田良太小野今五郎取立候事

一大里に而師匠逗留之義は鶴和長兵衛引請之事

但日和佐に而十五日大里に而十五日と相定置候尤右之內に而五日計鶴へも參候事

一大里四方原其餘右近村浦に而此度入門いたし候者とも之義師匠參居不申節は鶴和長兵衛安田量左衛門取立候事

一幼稚之輩手跡稽古之義は相賴申間敷候乍去最早手跡稽古指止居候者共書法筆意を學候義は不苦候事

一師匠を相頼世話を受候事故謝儀は相贈可申尤員數之義は人々之心に任せ極々薄儀に而宜候事

但極貧之向等は聊謝儀にも不及相候事

一日和佐大里共取立人之外に世話人無之而は難相成に付猶追而人柄相極可申事　以上

土地測量義申上書寫

（德島市岡崎三藏氏所藏）

武田一則□□
同　文則宜信
長谷川越前貞雄
岡崎三藏宜陳

右樣右衛門高弟三人御座候而名目をかへ三家に分れ候樣にも傳承仕候儀も御座候へ共何國に御座候哉承知不仕候只今に而は長崎表にて右傳絶候樣にも相聞へ申候尤近年勢州村井昌弘と申人博學之先生に而量地指南と申書を著述仕候是等も同流と相見へ候へ共彼家唯授一人之樣に相記御座候此義は如何御座候や右子細は樣右衛門時分異術之御疑御座候而一旦中絶仕其後四十年午頃又々再興仕候其節傳へ疑布義共御座候而淸水貞德出精仕夫々同行者猶又後世傳絶不申候樣にと本傳別傳一本術印可三部集之書を著し規矩尺法と名目を相立申候量地指南も皆々貞德著述之内を書替候物に御座候義に御座候定而余國にも多可有御座と奉存候近國には無御座也近年他國より御國元へ入込候類之内右樣之義相好候面々は私方へ罷越何角相尋器械等見せ呉候樣申人度々之義に折々御座候然處右傳來道具之内指當り入用之品は出來仕御座候へ共其余は雜形又は繪圖に而所持仕候右道具之内只今不便利之品も御座候へ共傳來候道具は不殘出來仕古代之形は相殘置申度奉存候

一大島流量地術之義は大阪浪人大島善右衛門喜侍と申人京都中根元圭大文算術門弟に而御座候中根義は天下之達人と承知仕候善右衛門義は高弟に而御座候則大學辨蒙と申書を著し候者に御座候若輩之時分より三都を執行仕江戸に逗留之内橋本流大阪に而中西流之丁見を相行着候趣に而其傳來左之通相記御座候

中西流丁見

中西十太夫正好

右は江戸糀町に住居算術を以其名高く其後本庄因幡候に仕二百石拜領其終所を不知丁見を村上佐助に相傳仕候

村上佐助義寄

右は備中松山城主水谷左京候物頭也水谷家斷絶之後大阪谷町筋南久寶寺町に住居其後江戸へ罷越岡野散木と相改申候丁見を善右衛門に相傳仕候

橋本流丁見

右は大阪川崎に住居算術を以名高く　本朝に而朱世傑之天文術を始而仕始候人古今筆法記天文術等之書を著し候人に而丁見を橋本平右衛門へ相傳仕候　　橋本傳兵衛正數

右は京二條に住居其名尤高く算法明解を著し暦學にも達人に而御座候丁見を田中十郎兵衛へ相傳仕候　　橋本平右衛門吉隆

右は京都椹木町に住居算術を以其名高く丁見を喜多新七に相傳仕候　　田中十郎兵衛吉眞

右は大和奈良之人後大阪に住居醫師と成名を以字と仕喜多治伯と相改申候元祿中公儀ゟ大和繪圖被仰付候節高取城主植村右衛門督殿治伯を召て爲臣大和繪圖出來之後暇を乞大阪へ罷歸候丁見を大島善右衛門へ相傳仕候　　喜多新七治伯

大島善右衛門喜侍

右と両流相傳且又御旗本島田關両先生丁見傳授を受尤年々罷越丁見極意を相極め見盤圖盤車盤袖盤郭公盤亥盤七通り之術を工夫仕大島流と相名付申候右出來後淡州ゟ御國元へ罷越淡州逗留之内病死仕候御両國に而三人へ相傳仕候處二家は傳絶へ長谷川家迄に相殘私へ相傳仕候

一右大島流前段之運に付和流は丁見大島流に相勝候丁見は無御座候へ共余國に一人も無御座候に付天文算術相學候方角之人は承り傳紅毛流ゟも大島流を相望候樣にも相聞候へ共是又道具夫々雛形に而所持仕候に付右同斷

一近年　公儀ゟ海岸測量として伊能勘解由殿御國元へも被罷越候其節相受候術も御座候哉と奉存候に付津田表へ御出之節私義も所役人に相交り拜見仕度被存候段御郡代へ申出御座候其節間數引等之手傳人數海岸之義故安宅御船頭御水主之二男三男御指出被成候に付伴武右衛門義も右之内へ相加り罷越可然旨御郡代被仰渡竹内武助と名相改右十人へ相加り淡洲岩屋ゟ土州御境目迄罷越申候其節南方へ相懸り候節勘解由殿樋留菊郎へ被相尋候は十一人之内武助と申人は致如何候人哉と被相尋候に付菊郎申述候は彼者義は何以存候者に而は無御座候へ共右樣之義相好候に付此度役頭ゟ申付罷越候趣申述候旨右同日勘解由殿武助を召呼候て其元義ヶ樣之義相好候趣左候へは疾改逢可申處右樣之儀も不存及挨拶不申何角相敎可申候今晩ゟは貴樣之場處へも無遠慮

罷出可申旨被仰聞夫々は日々深切に測量之義、御物語諸御道具等も夫々拜見仕候測量之被致方は格別之義も無御座候へ共御道具之義は夫々結構相速取候品々に御座候殊に諸方見返し之遠目鑑を仕込御道具抔は渡り物と相見へ量地術には里數を隔候術に至り候而は第一要用之物に御座候面々被用候磁石抔も便利宜布御座候右御道具類之雛形仕御用道具等雛形御郡代へも指出し是又

一流之義に御座候渡り物等は力に相及申間布候へ共一通り之品は仕置度奉存候

一先達而測地法に相記し候鐵炮弓鎗三段之丁見並に忍に相用候傘杖扇子之術は私相考に而是迄無御座候道具に而御座候得は仕置度奉存候

一甲州流分度傳授之義殊外相秘し候江戸表は如何御座候や御國元御家中甲州流先生も數多御座候へ共分度台取拵候人相聞へ不申右之運ひは分度台と申器物入用多小身に而は相調不申故之義と奉存候私義も若輩之砌甲州流稽古仕分度傳受候へ共席上口傳のみにて師家も不案内と相聞へ申候私義は家抔之義候得は右法ゟ工夫仕相解し申候右分度台扱方工夫仕能存甲州流傳授を受候ゆへ相好候得は相仕置度存居申候右に付本式には不仕候共稽古は丈夫に相調候樣仕置候て甲州流秘事之義に御座候得は稽古相好候面々へは相導き置候得は自然之時一助にも罷成可申哉共奉存候尤分度台之義は大器故戰場等へ用扱は相調申間布候へ共分度台之道理を能〳〵合点仕せ其上は引盤と申小器を拵へ相導き置候へは便利にも罷成可申やとも奉存候

右之通之存念には御座候へ共中々自力に相調義に而も無御座候右夫々出來仕候御道等は有御座間布哉極御内々御咄申上候　以上

（德島市森政一氏所藏）

鄕學入學奬勵御觸並請書

今般鄕學令改正不日於舊貨幣方役場開講候條文學筆道算術修行有志之者孰も出願入學可致旨諸町組々不洩樣可觸示候也

十一月六日　　大年寄中　　民政掛

右之通被仰付候條丁々小前之者迄無洩爲觸知廻濟ゟ可被差戻候　以上

午十一月六日　　森直次郎㊞

六番組丁々　　年寄中

右御布告之趣奉畏候

同日　大工町三丁目　酒井米藏㊞

同日　古物町年寄　後藤利兵衛㊞

同日　大工町一丁目年寄補　山口友吉㊞

同日　同　二丁目年寄　米津源藏㊞

同日　二軒屋町年寄　富藤宅兵衛㊞

（德島市　岡本昇氏所藏）

德島藩學事之略

德島藩學事略

學校は寺島本丁にありて學問處と稱せり

學派は德川氏に定めたる制度により朱子學にして中村惕齋の鈔說及ひ示蒙を尊崇し小學近思錄四書を主とし五經は易詩の外は用ひす又詩文は敎へす

支那歷史は種々用ひたり就中通鑑綱目左傳國語史記漢書を多く用ひたり

日本歷史は六國史逸史通語抔を用ひその頃山陽が日本外史を編せしも未刊行なり而して儒者仲間にては信用すること少し

敎育の仕方は一六の日は會讀あり二等に分ち上等は左國史漢下等は三史（十八史略元明史略國史略）なり二七の日は講釋あり（御儒者の任）多人數を一堂にあつめて聽かしむ二の日は小學七の日は四書なり御儒者に指支へあれは素讀方の內に代りて勤む是を助講と稱す（老練家を選へり）三八の日は會讀四九の日は輪講五十の日は休みなり素讀の授業と質問とは五十の外は休まず（年頭五節句暑中と年末とは休みなり）

一年に一度大復讀（サラヘ）會あり（素讀）勤惰をしらべ賞罰あり

講釋の日は御使番御通ひ小姓凡二人又小目付一人監臨す

輪講は素讀方之を聽き御儒者監臨す

貴賤の分別を嚴重にすれ共修業中は學術の優劣を以て席を立て身分の貴賤を問はす

講釋の時は當番の御儒者は肩衣を着す御使番も亦同し

素讀生は昨日授かりしところを調方の前にて一應取調へを受け今日の授業の可否を定ひ

御儒者は家老扱にて烟艸盆は家老所用の器と同一なる品を用ひたり

御儒者の仕用するは御掃除坊主なれとも坊主少人數故二七の日の外は學校へ來らす故に茶取と云童子を附屬せり性質品行のよき者を選擇す年齢は十歳以上十四五歳位の者にして此選にあたる者は榮とせり尤も給料なし

執務時間は四つ時（今の午前十時）より九つ時（今の十二時）までなり

御儒者は定員なし而して身分は大小姓格なれとも醫者繪師茶道と同一に君側の用事あれは元日禮とせり此時は家老以下組士までは元日に君侯へ祝儀を述ふ（元日禮）諸奉行は二日禮、以下三日禮四日禮あり

日々御通ひ小姓來校す是は生徒出席帳面を取り御儒者の本城へ申出つへき事柄を取次爲にして儒者の勞を省くためなり

學校奉行一人あり當時の奉行役は權力のつよきものなれとも學校奉行は至て輕きものにして今時の書記の首席位の者なり貶逐に逢ひし人が任せしなり

職員は素讀方若干人（士もあり卒もあり）取調方若干人（士のみ）筆者（今の書記）若干人御奉行筆者若干人小使門番若干人

綱目版すり役三人　人足一人

公子公女を教育する者は御用係又は御師範役と稱せり此務をとる者は學校の教授はなさず

右御儒者奉職中の記憶によりて之を記す

大正四年七月

徳島市富田浦町中園　岡本斯文記

參考目錄

開講監臨通知	徳島市	森政一氏
藩學校習字本	仝	岡本昇氏
學制頒布後學校改正演舌書	仝	馬詰梶五郎氏
資治通鑑綱目	仝	藤村九平氏
長久館西校生徒札	仝	多田仙次郎氏
藩政醫師と學校	仝	土田精義氏
習字本	海部郡	池内德藏氏

仝　日用習字本　仝　高畠一男氏
仝　女小學習字本　仝　吳羽勝太郎氏
仝　手紙文手本　仝　齋藤菊太郎氏
仝　字訓　美馬郡　武市昌晋氏
仝　習字本　三好郡　大西貞平氏
仝　柔術免狀　德島市　林天山氏
仝　目錄　仝　仝
仝　体術創業記　仝　仝
仝　免狀書簡　仝　仝
竹林派射術傳書　仝　侯爵蜂須賀家
小笠原流緒結形　仝　仝
藩學習字本　仝　山內時行氏
廣輝翁一書　仝　湯淺隆二氏

阿州住祐延作太刀　仝　高畠一男氏
海部住氏吉作太刀　仝　仝
仝　作脇指　仝　仝
海部住義氏作太刀　仝　仝
石川正直作脇指　仝　仝
笠井普輝作白鞘太刀　仝　仝
笠井信忠作枕槍白鞘入　仝　仝
流義免許狀　仝　仝
劍術砲術御見分に付達書　那賀郡　森良二氏
醫業開業者申出に付達書　仝　湯淺高太郎氏
貫心流劍術居合拳法骨碎の卷　仝　仝
仝　流劍術心得の卷　仝　猪子玉太郎氏
仝　流劍術決要の卷　仝　仝
武術免狀　名西郡　井上常彥氏

當三自筆の肖像　仝　武市昌晋氏
無左右流棒術目錄　美馬郡　仝
劍道集錄　仝　仝
習字本源氏物語　仝　仝
家傳秘記　仝　仝
丹石流劍術目錄並皆傳　仝　仝
心形刀流或問　仝　仝
新蔭流百首歌　仝　仝

治安

百姓逐電其他覺書

覺

（侯爵蜂須賀家所藏御代々樣御書寫中抄出）

美馬郡

一在々百姓等逐電不仕樣に堅可申聞之事
一請取かり念を入可申付之事
一於在々所々田畠にも可成地有之は所之百姓としてひらき可取候左候はゝ爲辛勞分二年は年貢一粒も申付間敷候三年前々其田畠に相當之年貢可申付候付給人百姓等に諸事申付樣善惡之事

以上

十二月十九日

㊞

渡邊九兵衛とのへ

（侯爵蜂須賀家所藏御代々樣御書寫中抄出）

外國船に付申付御狀

以上

急度申遣候仍從　公儀被仰出御觸狀昨日到來候間則寫遣候拜見可被得其意候黑舟いきりす舟なと

當國へ着候事終に無之事候併萬一着岸之儀も可在之候哉たとい大船小船によらす日本舟にて無之候はゝ一圓に相かまい申間敷候小舟をも出し詞なとかわす義在之間敷候れう船に至迄彼舟に近寄申儀堅無用に候浦々へ其旨可被申觸候

一自然寄舟なとゝ存下々むさと手をさし申儀も可在之候又者他國にて被取荒たる舟なと參候はゝ不苦儀存狼藉仕儀も可在之候此段猶以一大事之儀に候能々被得其意内々申付被置義專一に候何篇對彼舟猥仕合於在之者國之大事たるへく候間堅可被守其旨候又沖をはしり申候共かゝり申候とも有無に不存体に被仕何方へ參候とも一切かまひ申間敷候爲其如此候謹言

八月廿一日

阿波守

至鎭（御判）

森甚五兵衛とのへ

外國船御手當に付申付御狀

（侯爵蜂須賀家所藏御代々樣御書寫中抄出）

爲見舞飛脚指越着一折到來祝着候

一其方儀不斷碇泊に有之候間廻飛脚連狀之加判難成候條其方は各別に飛脚可指越旨得其意尤候併

加判無之儀は不苦候間此方ゟ如申遣面々割符之内へ相加り廻飛脚何れも同前に相心得尤候

一此度九州日向表へ大船相見へ候左候へは御政道被仰付南蠻舟にて可有之哉と當御地へ注進申上候就其一両日以前御老中ゟ被仰聞候は國々浦々番所彌念を入油斷に存間敷旨被仰聞候然者海部表大海を請機遣に存故其旨此度家老共方へ申遣候就其方罷在所海上手崎之義候間折々三四里計も慥なるものに申付小船を乘出し大船相見へ候か小船にても不審成舟相見へ候はゝ急度爰元へ致注進候樣に年寄共方へ可申達候少も油斷に存ましく候也

十月十九日

忠英（花押）

森甚五兵衛とのへ

外國船手當に付御狀

（侯爵蜂須賀家所藏御代々樣御書寫中抄出）

尙以右之趣かたく可被申付下々むさと風聞不仕候樣に被申付義肝要に候油斷有間しく候以上

一筆申遣候然者今朝松平伊豆殿へ家來三浦次郎右衛門を御呼井上筑後殿と一處に被仰渡候はからんた貳艘長崎へ着岸申彼者申上候は陽中にて南蠻舟に參會候條何國へ參候哉と申候へはごわへ商に參候と申ばてれん貳人乘せ申候由申上候に付若日本へ心指義も可有之候哉左候はゞ國々番處之

者に油斷不仕樣に堅可申付由被仰出候乍去新規に番處申付義に而は無之候條可得其意旨伊豆殿被
仰聞候長存旨御請申上候両國浦々番處以下堅可被申付候惣家老共方へも此由可申遣候へ共有來番
所之者に右之趣申付迄に而候間無其儀候堅可被申付候不及云下々若むさと事違風聞不仕候樣に被
申付候義肝要に候可被得其意候謹言

八月廿九日

（御判）
賀島主水殿
稲田九郎兵衛殿

松平右京樣被合仰條數々寫

（三好郡古郷吉右衛門氏所藏諸掟書中抄出）

定

一讃州御領分阿波淡路へ寛永廿一年申の年以來參候百姓男女共急度致穿鑿帳を以可追候其以後抱置候者相添其村々へ返可申事
一借銀借米之儀取遣申付間舗事
一御領分ゟ阿波淡路へ參此方に而女房持申者任緣付女房子可追事
一右貳ヶ條假諸代之女に而候共緣付同前之事
一生國御領分之者未の年阿波淡路へ罷越申の年以後此度御定之內御領分へ歸住之者生國次第可仕事
一年季之者本物返し取切共に取遣り申付間數事
一阿波淡路御家中侍方へ男女奉公人之儀相對次第可差置但斷有之者は返可被下事
一德島之町人商人諸職人之儀は御領分在々に罷在候共其身次第に可差置候但子細有之者は御斷次第返し可被下事
一阿波淡路自在々罷越候商人諸職之分在之儀不及申鐵高松に罷在候共可申付事
一申の年以前之儀に候へは重科之者は御理次第追之候條御渡し可被下事
一他國者年久敷阿波淡路に罷在申の年以後御領分へ參候共申分無御座候但斷有之者之儀は各別之事
一自他國召連來候諸代奉公人男女によらす申の年以前之者に候共斷次第返可被下事
一自今以後御領分ゟ若此方へ走來る者御座候而宿を借し申候はゝ或死罪或は過怠依其輕重可申付事
万一走人隱居申族候はゝ尋可遣之候條此方郡奉行手形次第宿等無異儀借し申彼走人相尋候樣

被仰付可被下候若科人逐電否不移時刻追懸參見逢候はゝ其所へ預置重而御斷可申事
一御領分ゟ此方領分へ走人追懸參候はゝその當座に科人相果候儀有之候共異儀御座有間敷候但御手形無之候はゝ留置從是可得御意事
一自今以後內通仕御領分之者を呼取候者御座候はゝ死罪可申付事
一自今以後御領分浦々ゟ當御領分之者他國へ渡海之儀此方郡奉行手形無之者は不被取越樣被仰付可被下事
一自今以後御領分と此方領分緣邊並養子停止可申付事
右之條々被仰合趣以來互に相違御坐有間敷候依而如件

慶長二年丑七月十四日

太田忠助
平野次左衛門
戸田半左衛門
長坂三郎左衛門

鈴木伊兵衛殿
平山杢右衛門殿

窪谷作兵衛殿

右三人ゟ此方へ書付同前に候以上

（名東郡富永久基氏所藏撰玉誌中抄出）

走人取遣之義相定條々

一讃岐國と阿波淡路走者取遣之義今度致御相談相定申條々
一寛永三年正月ゟ以前之走者經生國讃岐御國之者に而御座候者阿波淡路へ召置可申候不及申候得共右以後走候者何程年月を經候共生國次第に取遣可仕事
一他國之者御國に數年罷在阿波淡路へ走來候者之義寛永三年ゟ以前に御座候得共御理次第可返進事
一曲事人之義右之御定以前ゟ阿波淡路に在申候共御理次第に申付可進候自今以後自然と首尾にゟ當座に御とらへ被成候歟又は御討果候義有之とも異儀有間敷候但西島八兵衛殿三野四郎左衛門殿淺田右京殿御狀無御座候はゝ相改目是可得御意事
一自今以後走人阿波淡路に而相抱候者並に宿を借又は送迎仕者之義爲過怠米三石宛此方へ召置可申事此上は借物抔取遣候義は不及沙汰事

一町人共人を相抱候者請懸念を候へと若無念仕走者相抱候はゝ是又爲過怠米二石宛召置可申候但請人無念に候はゝ三石之過怠請人ゟ召置候事

一寛永三年ゟ今月迄之走者返進之刻借物在におゐては借候年之本分に而請取可申事

一内通仕人を呼取申者之儀急度可行死罪但今日ゟ以後之義に而御座候事

一百姓走人尋に罷越候はゝ御郡奉行之切手次第宿を可申付候並奉公人之義は西島八兵衛殿三野四郎左衛門殿淺田右京殿御切手可請事

一侍共相抱候走人取遣之刻借物之義年月重り候共本文請取可申事

一走人切米之約束に而奉公仕候はゝ取遣之刻日數算用次第切米遣可申事

一政所百姓下々迄御國と阿波淡路縁邊養子之義不被仰聞自今以後令停止事

一寛永三年正月ゟ以後之走人阿波淡路に罷在候内に此御國に而妻子を持申者返進之時は女房は此方に殘可申候並男子は父に付可進候女子は母に付此方に留可申候女之走者右同前に而可有御座事

右拾貳個條以後相違有御座間敷候爲其互に直に如此之書物取替し申候仍如件

長谷川伊豆守

池田内膳正
山田邦佐
中村若狭守

生駒左門殿
淺田右京殿
三野四郎左衛門殿
西島八兵衛殿
森出羽殿
生駒將監殿

寛永八年八月十五日

走人取遣に付御定書

（三好郡古郷吉右衛門氏所藏諸掘書中抄出）

一阿波淡路両御國と土佐國人取遣申定書物之事

一久敷走人者取遣仕間敷候今度於江戸被仰出候然は御條數は寛永十一年正月朔日以前之走人は取遣仕間舗事

一寛永十一年正月朔日以後走人は取遣可仕附走人阿波淡路於両御國女房持候はゝ其女房儀は御留

被成伴有之候はゝ男子は父に付御戻し有之女子は母に付御留置可被成候並走人借物等の儀は吟味之上を以本分返辨可申付事

一走人於重科輩は譬寛永十一年正月朔日以前に雖走來其理次第取遣可仕事

右申定趣自今以後相違御座有間敷者也依而如件

寛永十一年極月廿七日

益田主殿助殿　野中主計頭

森佐太右衛門殿

博奕法度申付覺書

（名西郡林省吾氏所藏御觸控帳中抄出）

覺

一博奕之事

右從先年法度雖言付彌堅可申付於違乱之輩有之は或死罪或可爲牢舍縱雖同類申出者於有之は赦其科可令褒美事

一從侍方町人へ賣付之事

右以相對證文取替可令沙汰若理不盡之輩於有之は家老方へ申屆其趣事

一於寺町死人火葬之事

右從先規雖令制禁之彌堅可申付事

右之趣堅可申付者也

萬治三年十月九日

光隆（御在判）

島八左衛門とのへ

奉公人侍取締其他定書寫

（名東郡富永久基氏所藏攝玉誌中抄出）

覺

一於當市中賣買之砌不依上下奉公人對町人理不盡之義申懸出入之打擲は可爲曲事但依科之趣可遂穿鑿之事

一自國之侍之義は不及云に對他客町人慮外成躰於仕は可爲曲事

一城下之女他國へ渡海之砌島八左衛門以切手可罷出不然乘船仕者於有之は可爲曲事勿論手形無之罷出候者雖後々相顯不可遁其科若相背者於有之は町奉行方迄可連來爲同類ども赦其科可加褒美

事

一就女猥之義市中へ罷出砌宿仕者有之は可爲曲事付町中之女之儀同前之事

一直人並又若黨以下市中へ罷出諸事猥族可爲曲事横目申付候條常々可相守其旨事

右定々若違乱之輩於有之は速忽可處罪科者也

萬治三年十月廿一日　　（御在判）

捨子制禁御觸書

（板野郡吉田次郎氏所藏）

一昨五日之曉梯夫左衞門屋敷之前石垣下にいまた臍之緒付候女之子捨有之に付早速取上養育仕候樣被仰付候然共右之女子殊之外草臥罷有養生不相叶昨朝果申候捨子仕義兼而從　公儀御制禁之處件之仕形不屆之事に候因茲御吟味被仰付候條右之捨子仕候者存知候へは急度書付以可申出旨郷中末々至迄可被申觸候　以上

卯月七日　　長谷川主計

右之趣從長谷川主計殿被仰出候條面々組村中不寄何者逸々遂吟味與切書付以來る十八日切に可申上候捨子御政道之事前々御國中一統御觸有之去夏も御制禁之儀末々至迄堅可申付候旨申聞置所今以不相守右樣之者間々有之は先年之御觸郷中庄屋年寄共末々者共に觸殘すにて可有之か依之去る午の年御制禁書左に記遣候條彌以末々に至迄きひしく可申渡置候　以上

元祿七戌年卯月八日

樋口内藏助
佐渡半兵衞
西尾新平
寺澤刑馬

板野郡與頭庄屋かたへ

一捨子いたし候事彌御制禁にて養育成かたきわけ有之候はゝ奉公人は其主人御料は代官手代私領は其村之名主五人組町方は其所之名主五人組へ其品申出へしはこくみ成かたきにおいては其所にて養育可仕候此上捨子仕候者急度曲事たるへき者也

午の十月　日

他國者取締御觸並請書

（麻植郡住友新十郎氏所藏）

覺

一近年市郷共他國者多入込就中市中へ入込候者は

御城其外御普請所日雇なとにも雇出候義有之に付
御山御城内へも入込御國者不案内之場所をも他國者能案内仕候儀有之候由に相聞候右様之義猥
に他國者不指置様屹可申付候　以上

辰の二月廿九日

町御奉行
郡御奉行

右之通御當職方ゟ被仰渡候條堅相守候樣に此後猥に差置不申樣に急度可相觸候若他國者年來御國
之罷越仕附居申樣之者有之候はゝ何年已前何樣之儀に付御國之罷越仕付居申旨其趣書付可申出候
尤當時指懸り罷越居申者又は日用抔等に罷越居申者は其所に留置委曲書付を以可申上候勿論他國
者罷越し居申を不申上隠置外ゟ於相顯は屹科可申付候右之趣面々と村中急度遂詮義有無之趣來月
六日迄に組切書付可指出候尤此狀刻付を以晝夜共印形加へ急々相廻相濟村ゟ可指戻候　以上

延享五年辰二月廿九日

下條成助
麻植郡組頭庄屋方へ

右之通御觸被遊候條各々村中逸々申聞承知印取候上庄屋五人與連判に而有無書付來る五日切に可
被指出候承知之旨村下々印加へ急々可被相廻候　以上

東川田村與頭庄屋
住友豊之進

組村々庄屋中
五人組中

右御觸之趣今日私共被召寄御讀聞被遊奉畏候此後他國者　及村中へ罷越候はゝ早速各々樣迄御
案内可申上候小家者共へは私共ゟ重々可申聞候若猥に成義御座候はゝ如何樣共可被仰付候仍而連
判を以御請申上候　以上

延享五年辰三月四日

壹家百姓
七兵衛㊞
同喜平次　同長兵衛　傳次郎　庄八　小次郎　同六左衛門　同友右衛門　同助次郎　同大右衛門
同半次郎　同久四郎　同林右衛門　同源四郎　同仁右衛門　同林助　同加七郎　同清次郎　同
理右衛門　同助一郎　同太郎助　同忠助　同兵右衛門　同傳次郎　同平二郎　同爲五郎　かた次
郎右衛門　同加右衛門　同助二郎　彌一郎後家　同曾兵衛　同傳次兵衛　同六兵衛　同仁助　同

勘左衛門　同菊松　左兵衛　同庄兵衛　同兵右衛門　同十助　行き市右衛門　同次右衛門

平兵衛殿

五人與中

穢多非人取締御觸請書

十一月十八日

（名東郡黒田勝一氏所藏）

梯辰郎

郡り御奉行

大目附ゟ

近來穢多非人等之類風俗惡百性町人へ對し法外之働致百性躰に紛し旅籠屋煮賣小酒屋等へ立入見咎め候得とも六ヶ敷申懸候得者百姓町人等は外聞に抱り用捨いたし置候故法外致增長就中中國筋之穢多非人茶筅之類盜賊惡黨者之宿又者盜ものの致世話既穢多共申合村々へ盜に入候者共追々引廻し死罪等御仕置申付候へ共風俗不爲相直由之取沙汰有之候盜惡事いたし候ものは勿論百性町人に對し慮外いたし候歟百性躰に紛し候ものは嚴敷御仕置申付段兼而穢多非人茶筅之類嚴敷申渡置相背候者有之候はゞ御料は御代官手代足輕差出召捕御勘定奉行へ可申達お私領も右に准し可申候若捨置場所有之候は最寄御代官ゟ手代足輕遣召捕□可有之候於然者其地頭之可爲不知者也

右之通御料私領不洩樣可被相觸候

戌の拾月

右之通御當職方被仰渡候條尤御書付之趣堅く相守候樣面々組村不依可被相觸尤穢多非人茶筅有之村之義は奉畏旨請書役人共手元迄取置其段組内以書付可申出候　巳上

十一月十九日

林小八郎

中尾佐五衛門

名東郡與頭庄屋方へ

右之通今度掟

御公儀樣被爲仰出候御趣に而今日私共御召出右之段逐々御讀聞被遊御觸之御趣奉畏候依而御請書差上申候て相違無御座候　巳上

安永七年戌の十一月廿九日

南新居村非人

治郎兵衛印

佐一兵衛印

右之通今度御觸被仰付候に付尤非人共ゟ御讀聞被成逐々奉畏旨御受書付差上申處私共於一座承知仕候　巳上

十一月廿九日

南新居村五人與
　　音五郎
　　嘉兵衛
　　官右衛門
　　彦兵衛
　　貞次郎

同村肝煎
　　元兵衛殿

七五六

南新居村肝煎
　　元兵衛様

德右衛門印

追放人無手形者等宿泊差留御觸並請書

御追放人又は他國者無手形者宿不仕候御觸之寫

（勝浦郡長尾要二氏所藏）

覺

惣而市中近郷におゐて不埒人有之追放又は追拂等被仰付候者共名を替其所へ頓而立戻り居申樣相聞へ候根元惡者故右躰之咎め申付候者共之義全還住候而は不相治甚以て如何敷事に候尤宿仕者有之故之義と相見へ候上輕しめ候仕方不屆之義に候條尚月々稠敷遂詮議候樣可有之候以後立歸り人有之脇ゟ相顯候はゝ本人並宿は勿論町役人庄屋五人組共も御咎可被仰付候間右之趣屹と可被申付候　以上

子　正　月

右之通御當職御書付を以被仰渡候條面々組村小百姓に至迄不相漏樣念を入相觸奉畏旨（與切）連判請書可指候並月々役人共相きまり其段其方共へ毎月書付取置其方共ゟ毎七月極月両度書付を以可申出候尤先達而相觸候他國者又は無手形者御きまりに付毎七月十二月両度に其方共書付指出來り候右書付に此度被仰出候前段立歸り者書付之儀壹紙に相約め候而無間違右両度可申出候組村ゟ取置候書付之儀も彌無懈怠樣了簡可仕候　以上

七五七

安永九年子二月朔日　　牛尾佐五右衛門

右御觸之通奉畏私共村浦一統相觸奉畏旨申出候に付御請書指上候　以上

子　二　月　　江田村組々　　庄屋　連判

牛尾佐五右衛様御手代

玉田茂一郎殿

右之通被仰下候條各奉承知畏旨御請印成先々順々御廻し可被成候並右御觸之立歸り人又は他國者之外無手形者等に宿不仕様に稠敷御申付可有之候尤先達之通毎月晦日迄に御本文之通之者に宿不仕書付御指越可被成候急々御指廻し相濟ゟ早々御戻し可被下候以上

二月十一日　　庄野藤右衛門

強訴徒黨御制禁觸書

（那賀郡藤田與三郎氏所藏）

強訴徒黨御制禁御觸書

覺

今度從

公儀別紙御書附之通被仰出候條御國中百姓共へ觸知せ可申候尤在々におゐて右書附之趣高札場又は村々役人共宅前等に張せ置猶毎月小百姓に至迄讀聞せ候様被申附義可有了簡候　以上

十月八日

大目付え

強訴徒黨悲落者前々ゟ御法度之所遠國之百姓共辨茂無之難立願を企及強訴又は徒黨いたして其恨有之者之家居を打こわす類有之其度々御仕置に相成去る巳年茂飛彈の國之者地所之改を令難澁致を越訴江戸表におゐて吟味中國元之社地ゟ大勢り御代官陣屋へ令強訴及狼藉嚴敷吟味之上頭取之内大膽成働致候者四人磔拾貳人は獄門壹人死罪指繼候者拾參人遠島夫ゟ以下品々御仕置申付取鎮候もの共へ白銀被下之其身一代帶刀永苗字御免其外徒黨強訴仕不加者共逸々御褒美御譽等有之所當春信濃の國高井水内両郡之百姓共御年貢期月之儀を申立騷立吟味之上今殷頭取之者貳人は獄門差繼候者六人遠島其以下追放等御仕置相濟指揮不加者共右同様御褒美御譽等有候飛彈と信濃者隣國に而不承事有之間舗所何か惡事を致候事とのみ存たるにて可有之哉以之外心得違成事に候都而願筋は村役人を以御領は御代官私領は地頭え訴吟味を可請事にて勿論御代官地頭非分を存候儀有